

いふばかりなし。さるほどに「行遣は進奉不參返す返す奇怪なり。確にめし籠めよ」と仰せ下されて二十日あまり候ひける程にこの次第を聞きしめて笑はせおはしましてぞ、召し籠めはゆりてけるとか。

藏人得業猿澤池龍の事

これも今は昔、奈良に藏人得業惠印といふ僧あり。鼻大きにて赤かりければ、大鼻の藏人得業といひけるをのちさまには事長しとて鼻藏人とぞいひける。猶後々には鼻藏鼻藏とのみいひけり。それが若かりける時に猿澤の池のはたに、その月のその日この池よりれう昇らむするなりといふ簡を建てけるを、往來の者若き老いたるさるべき人々「ゆかしき事かな」とさいめきわひたり。この鼻藏人、をかじし事かな、我がまたる事を人々騒ぎわひたり、をこの事かなと心の中にかしく思へども、すかしふせむとて空知らずして過ぎ行く程に、その月になりぬ。大かた大和河内和泉攝津國のもので聞き傳へて集ひ合ひたり。惠印いかにかくはあつまる、何かあらむ、やうのあるにこそ、怪しき事かなと思へどもさうけなくして過ぎ行く程に、既にその日になりぬれば道も去りぬへすひしめきあつまる。その時になりてこの惠印思ふやう、たいごにもあらじ我がまたる事なれどもやうのあるにこそと思ひければ、この事さもあらむすらむ、行きて見むと思ひて頭つゝみてゆく。大方近う寄りつゝべきにもあらず。興福寺の南大門の壇の上に登り立ちて、今や龍の昇るか昇るか待たれども、何のほらむぞ。日も入りぬ。くらぐらになりてさりとてはかくてあるべきならねば歸りける道

に、ひとつ橋にめぐらが渡りあひたりけるを、この惠印「あなぬふなのめぐらや」といひたりけるを、めぐらとりもあへず」あらじ。鼻くらなり」といひたりける。この惠印はななくらといふとも知らざりけれども、めぐらとりふにつきて「あらじ。鼻暗なり」といひたりか、鼻藏に言ひ合せたるがをかじし事のひとつなりとか。

清水寺御帳給はる女の事

今は昔、たよりなかりける女の清水にわながちに參るありけり。年月積りけれども露ばかりその験しと覺えたる事なく、いとゞ便りなくなりまざりてはては年比ありける所をも、その事となくあくがれて寄りつく所もなかりけるまゝに、ななくなく観音を怨み申して「如何なる先世の報なりとも、唯少しの便り賜はり候はむ」といりもみ申して御前にうつぶしうつぶしたりける夜の夢に「御前より」とて「かくわながちに申せばいとほしく思しめせど少しにてもあるべき便りのなければその事を思しめし歎くなり。これを給はれ」とて御帳の帷子をとよく疊みて前にうち置かると見て、夢覺めて御あかしの光に見れば、夢の如く御帳の帷子たゞまれて前にあるを見るに、さばこれより外にたぶべき物のなきにこそあれと思ふに、身の程の思ひ知られて悲しくて申すやう、これ更に賜はらじ。すこしのたよりも候は、錦をも御帳には縫ひて參らせむとこそ思ひ候ふに、この御帳ばかりを賜はりて罷り出づべきやうも候はず。返し參らせさふらひなむ」と申して、犬ふせぎの内にさし入れて置きぬ。又まごろみ入りたる夢に「なごさかしくはあるぞ。唯たばひ物をばたまはらでかく返しするらする、

怪しき事なり」とて又たまはると見る。さて覺めたるに、又同じやうに前にあれば、なくなく返し参らせつ。かやうにまつ、三度返し奉るに、猶又かへしたびてはてのたびは、この度返し奉らむはむいなるべきよしを誠められければ、かゝることも知らざらむ寺僧は御帳の帷子を盗みたるどやうたがはむすらむと思ふも苦しければ、まだ夜深く懐に入れて罷り出でにけり。これをいかにとすべしならむと思ひてひき廣げて見て、着るべききぬもなきにさはこれをきぬにして着むと思ふ心つきぬ。これをきぬにして着て後、見と見る男にもあれ女にもあれ哀にいとほしきものに思はれて、そいろなる人の手より物を多く得てけり。大事なる人の愛へをもそのきぬを着て知らぬやんごとなき所にも参りて申させければ、必ずなりけり。かやうにまつ、人の手より物を得、善き男にも思はれて楽しくてぞありける。さればそのきぬをばをさめて必ずせんと、思ふ事の折にぞ取り出で、着ける。かならずかなひけり。

則光ぬす人をさる事

今は昔、駿河前司橋季通が父に陵奥前司則光といふ人ありけり。兵家にはあらねども人に所おかれ、力などぞいみじう強かりける。世のおぼえなどありけり。若くて衛府の藏人にぞありける時、殿居所より女の許へ行くとして太刀ばかりを佩きて小舎人童を唯一人具して、大宮を下りにいきければ、大垣の内に入るとして、西の大垣の内は影にて人の立てらむ見えぬに、大垣の方より聲ばかりして「あの過ぐる人まかりとまれ。公達のおはしますぞ。えす

ぎし」といひければ、さればこそ思ひてすゝとく歩みて過ぐるを「おれはさては罷りなむや」とて走りかゝりて物のきければ、うつぶさて見るに、弓のかけは見えず。太刀のささらとして見えければ、木にはあらざりけりと思ひてかひよして逃ぐるを、追いつけてくれれば頭うち割られぬと覺ゆれば、俄に傍ざまにふと寄りたれば追ふ者の走りはやまりて、え留りあへず先に出でたれば、すこし立て、太刀を抜きて打ちければ、頭を中より打ち割りたりければ、うつぶしに走りまろびぬ。ようまつと思ふ程にあれば「いかにまつるぞ」といひて又物の走りかゝりければ、太刀をもえさしあへず脇に夾みて逃ぐるを「けやけきやつかな」といひて走りかゝりて來る者初めよりは走りのとく覺えければ、これはよもありつるやうには謀られじと思ひて、俄に居たりければ、走りはやまりたる者にて我に蹴躓きてうつぶしに倒れたりけるを、ちがひて立ちかゝりて起し立てず。頭を又うちわりてけり。今はかくと思ふほどに三人ありければ今一人が「さてはえやらじ。けやけくしていくやつかな」とてまうねく走りかゝりて來ければ「この度は我はあやまたれなむ。神佛助け給へ」と念じて、太刀を矛のやうにとりなして走りはやまりたるものに俄にふと立ち向ひければ、はるはると合せて走りあたりにけり。やつも斬りけれども餘りに近く走り當てければきぬだに斬れざりけり。矛のやうに持ちたりける太刀なりければ受けられて中より通りたりけるを、太刀の束を返しければのけさまにたふれたりけるを斬りてければ太刀持ちたるかひなを肩より打ち落してけり。さて走りのきて「又人やある」と聞きけれども、人の音もせざりければ走り舞ひて中

御門の門より入りて柱にかいそひて立ちて、小舎人童はいかゞつらむと待ちければ、童は
大宮をのぼりになくなくいきけるを呼びければ、喜びて走り來にけり。殿居所にやうて着換
取り寄せて着代へて、もと着たりける上のきぬ指貫には血のつきたりければ、童は深くか
くさせて、童の口よくかためて太刀に血のつきたる洗ひなとまたゝめて殿居所にさりげな
くて入りて臥しにけり。よもすがら我が去たるなど聞えやわらむすらむと胸うち騒ぎて思
ふ程に夜明けて後物どもいひ騒ぐ。「大宮大炊御門邊に大きある男三人幾程も隔てず斬り伏
せたる。あさましく使ひたる太刀かな。かたみに斬り合ひて死にたるかと思れば同じ太刀の
使ひさまなり。敵のまたりけるにや。されど盗人と覺しさまをまたる」など言ひのしる
を、殿上人ども「いざゆきて見てこむ」とてさそひて行けば、行かじはやと思へどもいかゞら
むもまた心得られぬさまなればさぶさぶにいぬ。車に乗りこぼれて遣り寄せて見ればいま
だともかくもまなざで置きたりけるに、年四十餘ばかりなる男のかつらひげなるが無紋の
袴に紺のあらひさらしのあき山吹のきぬの衫能く晒されたる着たるが、猪の鞘つかの後
鞘したる太刀佩きて猿の皮の足袋に沓さりはきなしてわきをかさおよびをさしてとむきか
うむき物言ふ男立てたり。何男にかと見る程に雑色の寄り來て「わの男の盗人敵に逢ひて仕
うまつりたると申す」と言ひければ、嬉しくもいふなる男かなと思ふ程に、車の前に乗りた
る殿上人の「かの男召し寄せよ。子細問はむ」といへば、雑色走り寄りて召しもて來たり。見
ればたかつら鬚にておとがひそり鼻さがりたり。赤髯なる男の血目に見なし片膝つきて太

刀の束に手をかけて居たり。「いかなりの事ぞ」と問へば「この夜中ばかりに物へ罷るとて
こゝを罷り過ぎつる程に、物の三人居ればまさに過ぎなむやとて、走り續きて參うで來つる
を、盗人なめりと思ひ給へてあひくらへ伏せて候ふなり。今朝見ればなにがしをひなしと思
ひ給ふべきやつばらにて候ひければ、敵にて仕りたりけるなめりと思ひ給ふれば、まや頭ど
もを斬つてかくさぶらふなり」と、たちぬぬおよびをさしなとかたり居れば、人々「さてさ
て」といひて問ひ聞けば、いとくくるふやうにしてかたりをる。その時にむ人にゆづりえて
面もたげられて見ける。けしきやまるからむと人まれす思ひたりけれど、われと名のるも
の、出で來たりければ、それにゆづりて止みにしとおもひて後に子どもにぞかたりける。

空入水またる僧の事

これも今は昔、桂川に身投げむする聖とてまづ祇陀林寺にして百日懺法行ひければ近き遠
きものとも道も去りあへず拜みに行きちがふ。女房車などひまなし。見れば三十あまりばか
りなる僧の細やかなる目をも人に見合せず。ねぶり目にて時々阿彌陀佛を申す。そのはざま
は唇ばかり働くは念佛なめりと見ゆ。又時々そこに息を放つやうに去て集ひたる者どもの
顔を見渡せば、その目に見合せむと集ひたるものどもこちおしあちおしひしめさ合ひたり。
さて既にその日のつとめては堂へ入りてさきにさし入りたる僧ども多く歩み續きたり。尻
に雜糞車にこの僧は紙の衣袈裟などをきて乗りたり。何といふにか唇はたらく。人に目も見合
せずして時々大息をぞはなつ。行く道に立ちなみたる見物の者どもうちまきを霞の降るや

うにまきぢらす。聖いかにかく自身に入る堪へ難し。志あらば紙袋などに入れて我が居たる所へ送れ」と時々いふ。これを無下のものは手を摺りて拜む。少し物の心ある者は「などかうはこの聖はいふぞ。唯今水に入りなむするにぎんだりへやれ。自身に入り堪へがたしなどいふことを怪しけれ」などいふ。めく者もあり。さてやりもて行きて、七條の末に遣り出したれば、京よりは優りて入水の聖拜まむとて河原の石よりも多く人集ひたり。河ばたへ車遣り寄せて立てれば、聖「唯今はなん時ぞ」といふ。供なる僧ども「申のくだりになり候ひにたり」といふ。「往生の刻限にはまだしかんなるは今少しくらせ」といふ。待ちかねて遠くより來たる者は歸りなどして河原人すくなになりぬ。これを見はてむと思ひたる者は猶立てり。それが中に僧のあるが「往生には刻限やは定むべき。心得ぬことかな」といふ。とかくいふほどにこの聖たうさきに西に向ひて川にさぶりと入る程に、絏なる繩に足をかけてづぶりと入りらむひしめく程に、弟子の聖はづしたれば倒れ入りてごぶごぶとするを、男の川へおり下りてよく見むとて立てるが、この聖の手を取りて引きあげたれば左右の手して顔はらひて、くみたる水を吐き棄て、この引き上げたる男に向ひて手をすりて「廣大の御恩義さふらひぬ。この御恩は極樂にて申し候はむ」といひて陸へ走りのぼるを、そこら集まりたる者ども重部河原の石を取りてまきかくるやうにうつ。はだかなる法師の河原くだりに走るを、集ひたる者ども受けとり受けとり打ちければ頭うち割られにけり。この法師にやありけむ、大和まり瓜を人の許へやりける文のうはがきに、さきの入水の上人と書きたりけるとか。

日藏上人吉野山にて鬼にあふ事

昔、吉野山の日藏の君、吉野の奥に行ひあり給ひけるに、たけ七尺ばかりの鬼、身の色は紺青の色にて髪は火の如くに赤く、頸細く、むね骨は殊にさし出で、いらめき、腹ふくれて、腰は細くありけるが、この行ひ人に逢ひて手を束ねて泣く事限りなし。「これは何事する鬼ぞ」と問へば、この鬼涙にむせびながら申すやう「我はこの四五百年を過ぎての昔人にて候ひしが、人のために怨を殺して今はかゝる鬼の身となりて候ふ。さてその敵をば思ひの如くに取り殺してさ。それが子孫ひこやしは子に至るまで、のこりなく取り殺してはて、今は殺すべきものなくなりぬ。さればなほ彼等が生れかほりまかる後までも知りて取り殺さむと思ひ候ふに、次々のうまれ所露も知らねば取り殺すべきやうなし。臍表のはのは同じやうにもゆれども敵の子孫は絶えはてたり。我一人盡させぬ臍表のはのはにもえこがれてせむ方なきくるしみをのみ受け侍り。かゝる心を起さずらましかば極樂天上にも生れなまし。殊に怨を留めてかゝる身となりて無量億劫の苦を受けむとすることのせむかたなく悲しく候ふ。人のために怨を殺すはまかしながら我が身のためにてこそありけれ。敵の子孫は盡さばてぬ。我が命はさほまりもなし。かねてこのやうを知らましかばかゝる怨をば残さずらまし」と言ひ續けて涙を流して泣く事かぎりなし。その間に上よりはのはやうやうもえ出でけり。さて山の奥さまへ歩み入りけり。さて日藏の君ははれと思ひて、それがために様々の罪滅ぶべき事どもを乞給ひけるとぞ。

丹後守保昌下向のとき致經の父に逢ふ事

これも今は昔、丹後守保昌國へ下りける時、與佐の山に白髪の武士一騎逢ひたり。路の傍なる木の下にうち入りて立ちたりけるを國司の郎等ども「この翁など馬よりおりざるぞ。奇怪なり。答めおろすべし」といふ。こゝに國司のひはく「一人當千の馬のたてやうなり。たゞにはあらぬ人を。答むべからず」と制してうち過ぐるほどに、三町ばかり行きて大矢の左衛門尉致經數多の兵を具して逢へり。國司會尺する間致經がいはく「こゝに老ひしや一人逢ひ奉りて候ひつらむ。致經が父平五大夫に候ふ。堅固の田舎人にて子細を知らず、無禮を現し候ひつらむ」といふ。致經過ぎて後「さればこそ」とぞいひけるとか。

出家功德の事

これも今は昔、筑紫にたうさかのさへとまらす齋の神をまします。そのはこらに修業しける僧の宿りて寝たりける夜、夜中はかりにはなりぬらむと思ふ程に、馬の足音のまたして人の過ぐると聞く程に「齋はましますか」と問ふこゑす。この宿りたる僧怪しと聞く程に、このはこらの内より「侍り」と答ふなり。又あさしと聞けば「明日武藏寺にや参り給ふ」と問ふれば「さも侍らず。何事の侍るぞ」とこたふ。明日武藏寺に新佛出で給ふべし」とて梵天帝尺諸天龍神集まり給ふとは知り給はぬか」といふなれば「なることも承らむらむらむらむ。うれしく告げ給へるかな。いかでか参らば侍らむ。必ず参らむする」といへば「さすれば明日の巳の時ばかりの事なり。必ず参り給へ。待ち申さむ」とて過ぎぬ。この僧これを聞きて、希有の事

をも聞きつるかな、明日は物へ行かむと思ひつれども、この事見てこそいつちも行かめと思ひて、明くるや遅きと武藏寺に参りて見れども、さるけしきもなし。何よりはなかなかえづかに人も見えす。あるやうあらむと思ひて、佛の御前に候ひて、巳時を待ち居たる程に、今暫しわらば午時になりなむす、いかなる事にかと思ひ居たる程に、年七十餘りばかりなる翁の髪もはげて白きともおろおろある頭に袋の烏帽子をひき入れて、もともちひささがいとい腰かゝまりたるが杖にすがりて歩む。尻に尻立てり。小く黒き桶に何にかあるらむ物入れてひきさげたり。御堂に参りて、男は佛の御前にてぬか三度ばかりつきて木樂子の念珠の大きに長き押しもみて候へば、尼そのもたる小桶を翁の傍に置き「御房呼び奉らむ」といぬ。暫しばかりあれば六十ばかりなる僧参りて佛拜み奉りて「何せむに呼び給ふぞ」と問へば、「今日明日ともえらぬ身に罷りなりにたればこの白髪の少し残りたるをそりて、御弟子にならむと思ふなり」といへば、僧目おしりて「いとたふとさることかな。さすればとくとく」とて小桶なりつるは湯なりけり。その湯にて頭洗ひてそりて戒授けつれば、又佛拜み奉りて罷り出でぬ。その後又こととなし。さはこの翁の法師になるを随喜して天は衆も集まり給ひて新佛の出でさせ給ふとはあるにこそありけれ、出家随分の功德とは今に始めたる事にはあらねどもまして若くさかりならむ人のよく道心おこして随分にせむものゝ功德、これにていよいよおしはかられたり。

宇治拾遺物語卷第十二

- 達磨見天竺僧行事
- 提婆ぼさつ參龍樹菩薩許事
- 慈惠僧正延引受戒之日事
- 内記上人破法師陰陽師紙冠事
- 持經者叙實効驗事
- 空也上人臂觀音院僧止祈直事
- 増賀上人參三條宮振舞の事
- 聖寶僧正渡一條大路事
- 殺斷聖不實露顯事
- 季直少將歌の事
- 權夫小童隱題哥讀事
- 高忠侍哥讀事
- つらゆさうたの事
- あづま人哥の事

河原院に融公の靈住む事

八歳童孔子問答の事

鄭太尉事

貧俗觀佛性富事

宗行郎等射虎事

遣唐使子被食虎事

或上達部中將之時逢召人事

陽成院妖物の事

水無瀬殿むさびの事

一條棧敷屋鬼の事

達磨見天竺僧行事

昔、天竺に一寺あり、住僧最おほし。達磨和尚この寺に入りて僧どもの行をうかひ見給ふに、或房には念佛し經を讀みさまさまに行ふ。或房を見給ふに、八九十なる老僧のたゞ二人居て圍碁を打つ。佛もなく經も見えず、唯圍碁を打つはかは他事なし。達磨件房を出で、他の僧に問ふに、答へていはく「この老僧二人若きより圍碁の外はすることなし。すべて佛法の名をだに聞かず。仍寺僧にくみいやしみて交會することなし。空しく僧供をうく。外道の如く思へり」と云々。和尚これを聞きて、定めてやうあらむと思ひて、この老僧が傍に居て圍

宇治拾遺物語卷第十二

- 達磨見天竺僧行事
- 提婆はさつ藤龍樹菩薩許事
- 慧惠僧正延引受戒之日事
- 内紀上人被法師陰陽師紙冠事
- 持經者叙實効驗事
- 空也上人臂觀音院僧止所高事
- 増賀上人參三條宮張舞の事
- 聖實僧正獲三條大路事
- 般斯聖不實靈顯事
- 季直少將歌の事
- 徳夫小童隱題所讀事
- 高忠侍所讀事
- つらゆさうたの事
- あづき人哥の事

河原院に融公の靈住む事

八歳童子問答の事

鄭太尉事

貧俗親佛性富事

宗行郎等射虎事

遣唐使子被食虎事

或上達部中將之時逢召人事

陽成院妖物の事

水無瀬殿むさびの事

一條棧敷屋鬼の事

達磨見天竺僧行事

昔、天竺に一寺あり、住僧最おほし。達磨和尚この寺に入りて僧どもの行をうかい見給ふに、或房には念佛し經を讀みまじまに行ふ。或房を見給ふに、八九十なる老僧のたゞ二人居て圍碁を打つ。佛もなく經も見えず、唯圍碁を打つはかは他事なし。達磨件房を出で、他の僧に問ふに、答へていはく「この老僧二人若きより圍碁の外はすることなし。すべて佛法の名をだに聞かず。仍寺僧にくみいやしみて交會することなし。空しく僧供をうく。外道の如く思へり」と云々。和尚これを聞きて、定めてやうむらむと思ひて、この老僧が傍に居て圍

碁打つあり様を見れば、一人は立てり一人は居りと見るに忽然として失せぬ。怪しく思ふ程に立てる僧は歸り居たりと見る程に、又居たる僧失せぬ。見れば又出でさぬ。さればこそと思ひて「園碁の外他事なしとうけ給はるに證果の上人にこそおはしけれ。その故を問ひ奉らむ」とのたまふに、老僧答へいはく「年來この事より外は他事なし。但し黒勝つ時は我が煩惱勝ちぬとかなしみ、白勝つ時は井勝ちぬとよろこぶ。打つに随ひて煩惱の黒を失ひ、井の白の勝つ事をおもふ。この功德によりて證果の身となり侍るあり」といふ。和尚房を出で、他僧に語り給ひければ、年來にくみいやしみつる人々後悔して皆尊みけりとなむ。

提婆ぼさつ參龍樹菩薩許事

昔、西天竺に龍樹井と申す上人まします。智慧甚深なり。又中天竺に提婆井と申す上人、龍樹の智慧深きよしを聞き給ひて西天竺に行き向ひて門外に立ちて案内を申さむと云給ふと云ふに、御弟子外より來給ひて、「いかなる人にてましますぞ」と問ふ。提婆井答へ給ふやう「大師の智慧深くましますよし承りて艱難をまのきて中天竺より遙々参りたり。このよし申すべし」といふのたまふ。御弟子龍樹に申しければ、小箱に水を入れて出さる。提婆試み給ひて衣の襟より針を一つ取り出してこの水に入れて返し奉る。これを見て龍樹大いに驚きて「早く入れ奉れ」とて、房中を掃ひ清めて入れ奉り給ふ。御弟子怪み思ふやう、水を與へ給ふことは遠國より遙々と來たり給へば疲れ給ふらむ、喉潤さむためと心得たれば、この人針を入れて返し給ふに、大師驚き給ひて敬ひ給ふ事心得ざることかなと思ひて、後に大師に問ひ申しけ

れば、答へ給ふやう「水を與へつるは、我が智慧は小箱の内の水のごとし。まかるに汝萬里をまのきて來たるちを浮べよとて水を與へつるなり。上人そらにその心を知りて針を水に入れて返す事は、我が針ばかりの智慧を以て汝が大海の底を極めむとなり。汝等年來隨逐すれどもこの心知らずしてこれを問ふ。上人は始めて來たれども我が心を知る。これ智慧のあるとなきとなり」と云々。即ち瓶水をうつすごとく法文を習ひ傳へ給ひて、中天竺にかへり給ひけりとなむ。

慈惠僧正延引受戒之日事

慈惠僧正良源永觀三年正月二日入滅。座主の時受戒行ふべき定日例の如く催し儲けて、座主の出世を相待つ所に、途中より俄に歸り給へば供の者どもこはひかにと心え難く思ひけり。衆徒諸識人も「これ程の大事日の定まりたる事を、今となりてさしたる障りもなきに延引せしめ給ふ事まかるべからず」と誘ふることかぎりなし。諸國の沙彌等まで悉く参り集ひて受戒すべしよし思ひ居たる所に横川小綱を便にて「今日の受戒は延引なり。重ねたる催に隨ひて行はるべきなり」と仰せ下しければ「何事によりて留め給ふぞ」と問ふ。使「またくその故を知らず。唯早く走り向ひてこのよしを申せとばかりの給ひつるぞ」といふ。あつまれる人々各心得ず思ひて皆退散しぬ。かゝるほどに未の時ばかりに大風吹きて南門俄に倒れぬ。その時人々の事あるべしとかねて悟りて延引せられけると思ひ合せけり。受戒行はれましかばそこばく地獄皆うち殺されなましと感じのしりけり。

内記上人破法師陰陽師紙冠事

内記上人寂心といふ人ありけり。道心堅固の人なり。堂を造り塔を建つる、最上の善根なりとて勸進せられけり。材木をば播磨國に行きて取られけり。こゝに法師陰陽師紙冠をきて被するを見つけて、あわて、馬よりおりて走り寄りて「何わざし給ふ御房ぞ」と問へば「被し候ふなり」といふ。「何しに紙冠をばきたるぞ」と問へば「被戸の神だちは法師をば忌み給へば、被するはとまばらくして侍るなり」といふに、上人聲を上げて大きに泣きて、陰陽師に取りかれば、陰陽師心得ず仰天して被をまきして「これは如何に」といふ。被せざる人もあきれて居たり。上人冠を取りて引き破りて泣く事限りなし。「いかにまうて御房は佛弟子となりて被戸の神達惡み給ふ」といひて「如來の忌む事を破りて暫しも無間地獄の業をば作り給ふぞ。誠に悲しきことなり。唯寂心を殺せ」といひて取りつきて泣く事おひたし。陰陽師のいはく「仰せらるゝこと最道理なり。世の過ぎがたければさりとてかくの如く仕るあり。まからずは、何わざをしてかは妻子をば養ひ我が命をも積ま侍らむ。道心なければ上人にもならず。法師のかたち侍れと俗人の如くなれば後世の事いかと悲しく侍れど、世のならひにて侍ればかやうに侍るなり」といふ。上人のいふやう「それはさもあれ、いか三世如來の御首に冠をば着給ふ。不幸に堪へずしてかやうの事な給は、堂造らむ料に勸進し集めたる物どもを汝になむ與へむ。一人井に勤むれば堂造るに勝りたる功德あり」といひて、弟子どもをつかはして材木取らむとて、勸進し集めたるものを皆運び寄せてこの陰陽師に取らせ

つ。さて我が身は京に上り給ひにけり。

持經者叙實効驗事

昔、開院大臣殿冬嗣三位中將におはしける時わらはやみを重く煩ひ給ひけるが、「神名といふ所に叙實といふ持經者なむわらはやみはよく祈り落し給ふ」と申す人ありければ、この持經者に祈らせむとて行き給ふに、荒見川のはどにて早うおこり給ひぬ。寺は近くなりければこれより歸るべきやうなして、念じて神名におはして房の簾に車を寄せて案内をいひ入れ給ふに、「近頃蒜を食ひ侍り」と申す。「まかれども唯上人を見奉らむ。唯今罷りかへる事かなひ侍らじ」とありければ、「さらばはや入り給へ」とて、房の部おろし立てたるを取りて新しきむしろ敷きて「入り給へ」と申しければ入り給ひぬ。持經者沐浴してとばかりありて出で合ひぬ。長高き僧の瘦せさらばひて見るに貴げなり。僧申すやう「風おもく侍るに、醫師の申すに隨ひて蒜を食ひて候ふなり。それにかやうにおはしませば讀み奉らむ、なでうことか候はむ」と候ふなり。法華經は淨不淨を嫌はぬ經にてましませば讀み奉らむ、なでうことか候はむ」とて念珠を押し摺りてそばへ寄り來たる程最たのもし。御頭に手を入れて我が膝を枕にせさせ申して壽量品をうち出して讀む聲はいとたふとし。さばかり貴き事もありけりとおほゆ。すこしまわかれて高聲に誦する聲誠にあはれなり。持經者目より大きな涙をばらはらとおとして泣くとかきりなし。その時覺めて御心ちいとさはやかに残りなくよくなり給ひぬ。かへすがへす後世まで契りてかへり給ひぬ。それよりぞ有驗の名は高くひろまりけるとか。

空也上人臂観音院僧正祈直事

昔、空也上人申すべき事ありて一條大臣殿に参りて藏人所にのぼりて居たり。餘慶僧正又参會し給ふ。物語など乞給ふ程に僧正の給ふ「その臂はいかにして折り給へるぞ」と。上人のい「我が母物妬みして幼少の時片手を取りて投げ侍りし程に折り侍るとぞ聞き侍りし。幼少の時事なれば覺え侍らす。かしこく左にて侍る。右手折り侍らましかば」といふ。僧正の給ふ「そこは貴き上人にておはす。天皇の御子とこそ人は申せ。いと忝けなし。御臂誠に祈り直し申さむはいかに」。上人いふ「最悦び侍るべし。實に貴く侍りなむ。この加持し給へ」とて近く寄れば、殿中の人々凄りてこれを見る。その時僧正頂より黒けぶりを出して加持し給ふに、暫らくありて曲れる臂はたとなりて伸びぬ。則ち右の臂の如くに伸びたり。上人涙を落して三度禮拜す。見る人皆の「めき感じ或は泣きけり。その日上人供に若き聖三人具したる壁を塗る事をす。一人は瓜の皮を取り集めて水に洗ひて獄衆に與へけり。一人は反古の落ち散りたるを拾ひ集めて紙にすきて經を書き寫し奉る。その反古の聖を臂直りたる布施に僧正に奉りければ、喜びて弟子になして義親と名づけ給ふ。ありがたかりけることなり。

増賀上人参三條宮振舞事

昔、多武峯に増賀上人とて貴き聖おはしけり。極めて心武うさびしくおはしけり。偏に名利を厭ひて頗物ぐるはしくなむわごとふるまひ給ひけり。三條大ささいの宮尼にならせ給は

むとて戒師のために召しに遣はされければ「もつともたふとまことなり。増賀こそは誠になし奉らめ」とて参りけり。弟子どもこの御使を怒つて打ち給ひなむとやせむすらむとおもふに、思の外に心やすく参り給へばありがたき事に思ひあへり。かくて宮に参りたるよし申しければ、喜びて召し入れ給ひて尼になり給ふに、上達部僧ども多く参り集まり内裏より御使などまゐりたるにこの上人は目は恐ろしげなるが體も貴げながら煩はしげになむおはしける。さて御まへに召し入れて御几帳のもとに参りて出家の作法してめでたく長き御髪を掻き出してこの上人にはさせらる。御簾の中に女房達見て泣く事限なし。はさみはて、出でなむとする時、上人高聲にいふやう「増賀をしもあながちに召すは何事ぞ。心得られ候はず。若し穢き物を大きなりと聞しめしたるか。人のよりは大きに候へども今は練衣のやうにくたくたとなりたるものを」といふに、御簾の内近く候ふ女房達、はかには公卿殿上人僧達これ聞くにあさましく目口はたかりて覺ゆ。宮の御心ちも更なり、貴さも皆失せて各身より汗あえて我にもあらぬ心ちす。さて上人さがり出でなむとて袖かき合せて「年まかりよりに風重くなりて今は唯痲病のみつかまつれば参るまじく候ひつるを、わざと召し候ひつればあひ構へて候ひつる。堪へ難くなりて候へば急ぎ罷り出で候ふなり」とて、出でさまに西臺の簀子につい居て尻をかへげて様口より水を出すやうにひりちらす。音高く轟る事限りなし。御前まできこゆ。若き殿上人笑ひのゝしることおびたし。僧達はかゝる物狂をめしたる事と誇り申しけり。かやうに事にふれて物狂にわざとふるまひけれど、それにつけても

貴さおぼえはらよらよさざりけり。

聖賢僧正渡一條大路事

昔、東大寺に上座法師のいみじく樂しきありけり。露ばかりも人に物と與ふる事をせず慳貪に罪深く見えければ、その時聖賢僧正の若き僧にておはしけるが、この上座の借ひ罪のあさましきにとてわざとあらがひをせられけり。「御房何事きたらむに大衆に借ひかむ」といひければ、上座おもふやう、物あらがひしてもし負けたらむに借ひかむよしなし、さりながら衆中にてかく言ふ事を何とも答へざらむ口惜しと思ひて、かれがえすまじき事を思ひめぐらしていふやう「賀茂祭の日まはだかにてたぶささばかりをして干蛙太刀に佩きて瘦せたる女牛に乗りて一條大路を大宮より河原まで、我は東大寺の聖賢なりと高く名のりて渡り給へ。まからばこの御寺の大衆より下部に至るまで大僧供ひかむ」といふ。心中にさりともよもせしと思ひければ固くあらがふ。聖賢大衆皆催し集めて、大佛の御まへにてかねうちて佛に申して去りぬ。その期近くなりて一條宮小路に棧敷うちて、聖賢か渡らむ見むとて大衆皆集まりぬ。上座もありけり。まばらくなりて大路の見物のものども夥しくのしる。何事かあらむと思ひて頭さし出して西の方を見れば、牝牛に乗りたる法師のはだかなるが干蛙を太刀に佩きて牛の尻をはたはたと打ちて尻に百千の重部つきて「東大寺の聖賢こそ上座とあらがひしてわたれ」とたかくいひけり。その年の祭にはこれを證にてぞありける。さて大衆おのおの寺にかへりて上座に大僧供ひかせたりけり。この事帝聞しめして「聖賢

貴は我が身を棄て、人々導くものにならば、今の世にいかでかゝる貴人ありけむ」と召し出して僧正をなしめ給ひけり。上の醍醐はこの僧正の建立なり。

殺斷聖不實露頭事

昔、从しく行へ上人ありけり。五穀を断ちて年來になりぬ。みかど聞しめして、神泉におがりするて殊に貴みたまふ。木の葉をのみ食ひける。物わらひする若公達のつらりと、この聖の心みじとて行き向ひて見るにいとたゞとげに見ゆれば「殺斷幾年ばかりになり給ふ」と問はれければ「若きより断ち侍れば、五十餘年に罷りたりぬ」といふを聞き、一人の殿上人のいはく「殺斷の尿はいかやうにかあるらむ。例の人には變りたるらむ。いで行きて見む」といへば「二三人連れて行きて見れば殺尿を多くいりおきたり。あやしと思ひて「上人の出でたるひまに占たる下を見む」といひて、壘の下を引きあげて見れば、土を少し掘りて布袋に米を入れ置きたり。公達見て、手を叩き「殺斷聖殺斷聖」といふりての、しり笑ひければ逃げ去りにけり。その後は行きたがなも長く失せにけりとなむ。

季直少將歌の事

今は昔、季直少將といふ人ありけり。病つきて後少しをこたむ内に入りたりけり。公忠兼の掃部助にて藏人なりけるこの事なり。「みだり心ちまたよくもをこたり侍らねども、心もとなくて参り侍りつる後は知らねどかきまで侍ればあさてばかりに又参り侍らむ。よさに申させ給へ」とてさかり出でぬ。三日ばかりありて、少將の許より、

貴さおぼえはいよいよまさりけり。

聖寶僧正渡一條大路事

昔、東大寺に上座法師のいみじく樂しきありけり。露ばかりも人に物を與ふる事をせず慳貪に罪深く見えければ、その時聖寶僧正の若き僧にておはしけるが、この上座の惜む罪のあさましきにとてわざとわらがひをせられけり。「御房何事きたらむに大衆に僧供ひかむ」といひければ、上座おもふやう、物わらがひしてもし負けたらむに僧供ひかむよしなし、さりながら衆中にてかく言ふ事を何とも答へざらむも口惜しと思ひて、かれがえすまじき事を思ひめぐらしていふやう「賀茂祭の日まはだかにたぶささばかりをして干蛙太刀に佩きて瘦せたる女牛に乗りて一條大路を大宮より河原まで、我は東大寺の聖寶なりと高く名のりて渡り給へ。茲からばこの御寺の大衆より下部に至るまで大僧供ひかむ」といふ。心中にさりともよもせじと思ひければ固くわらがふ。聖寶大衆皆催し集めて、大佛の御まへにてかねうちて佛に申して去りぬ。その期近くなりて一條富小路に棧敷うちて、聖寶か渡らむ見むる。何事かわらむと思ひて頭さし出して西の方を見れば、牝牛に乗りたる法師のはだかなるが干蛙を太刀に佩きて牛の尻をはたはたと打ちて尻に百千の童部つきて「東大寺の聖寶こそ上座とわらがひしてわたれ」とたかくいひけり。その年の祭にはこれを詮にてぞありける。さて大衆おのおの寺にかへりて上座に大僧供ひかせたりけり。この事帝聞しめして「聖

寶は我が身を棄て、人を導くものにこそありけれ。今の世にいかでかゝる貴人ありけむ」とて、召し出して僧正までなしわげさせ給ひけり。上の醍醐はこの僧正の建立なり。

殺斷聖不實露頭事

昔、久しく行ふ上人ありけり。五穀を斷ちて年來になりぬ。みかど聞しめして、神泉にわがめするて殊に貴みたまふ。木の葉をのみ食ひける。物わらひする若公達あつまりて、この聖の心みむとて行き向ひて見るにいとたふとげに見ゆれば「殺斷幾年ばかりになり給ふ」と問はれければ「若きより斷ち侍れば、五十餘年に罷りなりぬ」といふを聞きて、一人の殿上人のいはく「殺斷の尿はいかやうにかあるらむ。例の人には變りたるらむ。いで行きて見む」といへば、「三人連れて行きて見れば殺尿を多くひりおきたり。あやしと思ひて「上人の出でたるひまに居たる下を見む」といひて、壘の下を引きあけて見れば、土を少し掘りて布袋に米を入れて置きたり。公達見て、手を叩きて「殺斷聖殺斷聖」とよばりての、しり笑ひければ逃げ去りにけり。その後は行きがたもえらす長く失せにけりとなむ。

季直少將歌の事

今は昔、季直少將といふ人ありけり。病つきて後少しをこたりて内に參りたりけり。公忠辨の掃部助にて藏人なりけるころの事なり。「みだり心ちまたよくもをこたり侍らねども、心もとなくて參り侍りつる後は知らねどかくまで侍ればあさてばかりに又參り侍らむ。よきに申させ給へ」とてさかり出でぬ。三日ばかりありて、少將の許より、

「悔しくぞ後に逢はむとちぎりける今日をかぎりといはまじものを。」
さてその日うせにけり。おはれなることのみまなり。

樵夫小童隠題哥讀事

今は昔、隠題をいみじく興せさせ給ひけるみかどの筆蹟をよませられけるに、人々わろく詠みたりけるに、木こる童の曉山へ行くといひける。此の頃筆蹟を詠ませさせ給ふなるを、人のえ詠み給はざんなる。童こそ詠みたれといひければ、具して行く。童部、おなほけなる事ないひそ。さまにも似すいまひましといひければ、などか必ずさまに似る事か」とて、
「めぐりくるはるはることに櫻花いくたび散りき人に問はれや」といひたりける。さまにも似す思ひかけずぞ。

高忠侍哥讀事

今は昔、高忠といひける越前守の時にいみじく不幸なりける侍の夜盡まめなるが冬なれど帷子をなむきたりける。雪のいみじく降る日この侍きよめすとてものつきたるやうにふるふを見て守守の御侍「歌よめ。をかしうふる雪かな」といへば、この侍、何を題に仕るべきぞ」と申せば「はだかなるよしを詠め」といふに、程もなく震ふ聲をさげてよみあぐ。
「はだかなる我が身にかゝる雪はうちばらへとも消えせざりけり」と詠みければ、守いみじく譽めて着たりける衣をぬきて取らす。北の方もおはれがりて薄色の衣のいみじうかうはしさを取らせければ、二つながら取りてかいわぐみて脇にはさみて

たちざりぬ。侍に行きたれば居なみたる侍も見て驚き怪しがりて問ひけるに、かくと聞きてあさましかりけり。さてこの侍、その後見えざりければあやしがりて、守尋ねさせければ、北山にたふとさ聖ありけり。そこへ行きてこの得たる衣を二つながら取らせて言ひけるやう「年まかり老いぬる身の不幸としおひてまざる。この生の事はやくもなき身に候ふゆり。後生をだにいかでかとおぼえて、法師にまかりならむとおもひ侍れど、戒の師に奉るべき物の候はねば今に過さし候ひつるに、かく思ひかけぬ物を賜ひたれば限りなくうれしく思ひひ給うて、これを布施にまゐらするなり」とて「法師になさせ給へ」と涙にむせかへりてなくなくいひければ、聖いみじうたふとがりて法師になしてけり。さてそこより行くかたもなくて失せにけり。ありどころも知らずなりにけるとか。

つらゆきうたの事

今は昔、貫之が土左守になりて、くだりてありけるほどに、任はての年七つ八つばかりの子のえもいはずをかしげなるを、かぎりなく悲しうまけるがとかくわづらひてうせにければ、泣き感ひてやまひつくばかり思ひこがる程に、月比になりぬればかくてのみあるべきことかは、のぼりなむと思ふに、ちこのこゝにて、何とありしはやなど思ひ出でられて、いみじう悲しかりければ柱に書きつけしる、
「都へと思ふにつけてかなしきはかへらぬ人のあればなりけり」と書きつけたりける歌なむ、今までありける。

あづま人哥の事

今は昔、あづまうどの歌いみじう好みけるが、笠を見て、
「あなてりやや蟲のまやじりに火のつきて人魂とも見えわたるかな」
あづま人のやうに詠まむとて、實は貫之がよみたりけるとぞ。

河原院に融公靈の住む事

今は昔、河原院は融の左大臣の家なり。みちのくの鹽籠の形を作りてうしほを汲み寄せて鹽を焼かせなご様々のごかしき事を盡して住み給ひける。おとらうせて後、宇多院には奉りたるなり。延喜の御門度々行幸ありけり。また院の住ませ給ひける折に、夜中ばかりに西の對の塗籠をわけてこよめきて人の參るやうにおぼされければ、見させ給へば、緋の裝束するはしくまたる人の太刀佩き笏取りて二問ばかりのきて畏まりて居たり。「あれはたぞ」と問はせ給へば「このぬしに候ふ翁なり」とまうす。「融のおとらか」と問はせ給へば「まかに候ふ」と申す。「さはなんぞ」と仰せらるれば「家なれば住み候ふにおはしますがかたじけなく所せく候ふなり。いか仕ふへからむ」と申せば「それはいとことやうの事なり。故おとらの子孫の我に取らせたれば、住むにこそあれ。わが押し取りて居たらばこそあらめ、禮も知らずいかにかくは怨むるぞ」と高やかに仰せられければ、掻い消つやうにうせぬ。そのまりの人々「猶帝はかくことにおはしますものなり。たゞの人はそのおとらに逢ひて、さやうにすくよかには言ひてむや」とぞいひける。

八歳童孔子問答の事

今は昔、もろこしに孔子道を行きたまふに、入つばかりなる童逢ひぬ。孔子に問ひ申すやう「日の入る所と洛陽といづれか遠き」と孔子いらへ給ふやう「日の入る所は遠し。洛陽は近し」。童のまうすやう「日の出で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出づる所は近し。洛陽は遠しと思ふ」と申しければ、孔子賢き童なりと感じ給ひける。「孔子にはかく物問ひかくる人もなきに、かく問ひけるは、たゞのものにはあらぬなりけり」とぞ人いひける。

鄭太尉事

今は昔、親に孝する者ありけり。朝夕に木をこりて親を養ふ。孝養の心空に知られぬ。かぢもなき船に乗りて向ひの島に行くに、朝には南の風吹きて北の島に吹きつけつ。夕には又船に木をこりて入れて居たれば北の風吹きて家に吹きつけつ。かくの如くするほどに年比になりておほやけに聞しめして、大臣になして召し使はる。その者を鄭太尉とぞいひける。

貧俗觀佛性富事

今は昔、もろこしのへんまうに一人の男あり。家貧しくして貧なし。妻子を養ふに力なし。もとむれども得ることなし。かくて年月をふ。思ひ控びて或僧に逢ひてたからを得べきことを問ふ。智恵ある僧にて答ふるやう「汝たからを得むと思は、たゞ誠の心を起すべし。さらば財も豊に後世はよき所にうまれなむ」といふ。この人「誠の心とはいかに」と問へば、僧のいはく「まことの心を起すといふは他の事にあらず。佛法を信するなり」といふに、又問ひてい

はく「それはいかにも、儘に承りて心を得て頼み思ひて、二なく信をなし頼み申さむ。承はるべし」といへば、僧のいはく「我が心はこれ佛なり。我が心を離れては佛なしと、まかれば我が心の故に佛はいますなり」といへば、手をすりてなくなく拜みて、それよりこの事を心にかけて夜書思ひければ、梵尺諸天來たりてまもり給ひければ、はからざるに實出で來て家の内ゆたかになりぬ。命をはるにいよいよ心佛を念じ入りて、淨土に速に參りてけり。この事を聞き見る人たふとみわはれみけるとなむ。

宗行郎等射虎事

今は昔、壹岐守宗行が郎等をはかなき事によりて主の殺さむとまければ、小舟に乗りて逃げて新羅國へ渡りて隠れて居たりける程に新羅のきんがいとみよ所のいみじう罵り騒ぐ。「何事ぞ」と問へば「虎のこふに入りて人をくらふなり」といふ。この男問ふ「虎は幾つばかりあるぞ」と「唯一つあるが俄に出で來て人をくらひて逃げていきいきするなり」といふを聞きてこの男のいふやう「あの虎に逢ひて、一矢を射て死なばや。虎かしくば共にこそ死なめ。唯空しうはいかでかく、さなれむ。この國の人は兵の道わるさにこそはあれ」といひけるを、人聞きて、國の守に「かうかうの事をこそこの日本人申せ」と言ひければ「畏き事かな。呼べ」といへば人來て「召しあり」といへば參りぬ。「誠にや、この虎の人ぐふを易く射むとは申すなり」と問はれければ「然申し候ひぬ」と答ふ。守「いかでかゝる事をば申すぞ」と問へば、この男の申すやう「この國の人は、我が身をばまたくして、敵をば害せむと思ひたれば、おほろ

けにてかやうの猛き獸などには我が身の損せられぬべければ、罷り逢はぬにこそ候ふめれ。日本の人はいかにも我が身をばなきになして罷り逢へば、よき事も候ふめり。言矢にたづさはらむもの何しかは我が身を思はむ事は候はむ」と申しければ、守「さて虎をば必ず射殺してむや」といひければ「我が身のいきいかすは知らず。必ず彼をば射取り侍りなむ」と申せば「是とみじうかしこき事かな。さらば必ずかまへて射よ。いみじき悦びせむ」といへば、をのこ申すやう「さていづくに候ふぞ。人をばいかやうにてくひ侍るぞ」と申せば、守のいはく「如何なる折にかあるらむ、こふの中に入り來て人一人を頭をくらひて肩にうちかけて去るなり」と。この男申すやう「さて如何にしてかくひ候ふ」と問へば、人のいふやう「虎は先人をくはむとては猫の鼠を窺ふやうにひれふして暫しばかりありて大口をあきて飛びかゝり、頭をくひて肩にうち掛けて走り去る」といふ。とてもかくてもさばれいと矢射てこそはくらはれ侍らめ。その虎の在り所を教へよ」といへば「これより西に三十四町のきて芋の島あり。それになむふすなり。人恐ぢてあへてそのわたりに行かず」といふ。「己れ唯知り侍らずともそなたをさして罷らむ」といひて調度負ひていぬ。新羅の人々「日本の人ははかなし。虎に食はれなむ」と集まりてそしり。かくてこの男は虎の在り所聞きて行きて見れば、誠に鳥はるばると生ひわたりたり。をのたけ四尺ばかりなり。そのなかを分け行きて見れば誠に虎ふしたり。とがり矢をばげて片膝を立て、居たり。虎人の香を嗅ぎてついひらがりて猫の風窺ふやうにてあるを、をのこ矢をばげて音もせで居たれば虎大口をあきて躍りてをのこ

の上にかゝるを、その弓を強く引きてうへにかゝる折にやがて矢を放ちたれば、願の下よりなほ七八寸ばかりとがり矢を射出しつ。虎倒に伏して仆れてあがくを、雁股をつがひ二たび腹を射る。二度ながら土に射つけて、遂に殺して矢をも抜かて國府に歸りて、守にかうから射殺しつるよしふに、守威のしりて多くの人を具して虎の許へ行き見て見れば、誠に箭三つながら射通されたり。見るにいとみじく、誠に百千の虎起りて懸るとも、日本の人十人ばかり馬にて押し向ひて射ば、虎何わざかせむ。この國の人は一尺ばかりの矢に鏝のやうなる鏝をすげてそれに毒を塗りて射れば、遂にはその毒の故に死ぬれども、忽にその庭に射伏す事はせず。日本人は我が命死なむをも露惜まず、大きな矢にて射ればその庭に射殺しつ。猶兵の道は日本人には當るべくもあらず。さればよしよしと恐ろしく覺ゆる國なり」とておぢけり。さてこのことを猶惜み留めていたはりけれど、妻子を戀ひて筑紫にかへりて宗行が許に行きてそのよしをかたりければ「日本の面興したる者なり」とて、勘當も免してけり。多くの物とも祿に得たりける。宗行にも取らず。多くの商人ども新羅の人のいふを聞きて語りければ、筑紫にもこの國の人の兵はいみじきものにぞしけるとか。

遣唐使子被食虎事

今は昔、遣唐使にてもろこしに渡りける人の、十ばかりなる子を見であるまじかりければ具して渡りぬ。さて過ぐしける程に、雪のいと高く降りたりける日ありきもせで居たりけるに、このちの遊に出で、いぬるが歸りの遅かりければ怪しと思ひて出で、見れば、足が

たうしろの方から蹈みて行きたるはそひて、大きな犬の足がたわりてそれよりこのちの足がた見えす。山さまに行きたるを見て、これは虎のくひていきけるなめりと思ふに、せむ方なく悲しくて、太刀を抜きて足がたを尋ねて山の方に行きて見れば、岩屋の口にこのちを食ひ殺して腹をねぶりてふせり。太刀を持ちて走り寄れば、え逃げてもいかでかいかにまりて居たるを、太刀にて頭を打てば鯉の頭を割るやうにわれぬ。次にまたそばさまにくはむとて走り寄るせなかを打てば背骨をうち切りてくだたとなしつ。さて子をば死にたれども、脇にかいはさみて家に歸りたれば、その國の人々見ておぢあむ事かぎりなし。唐土の人は虎に逢ひて逃ぐる事だに難さにかく虎をば打ち殺して子を取り返して來たれば、唐土の人はいみじき事にいひて猶日本の國には、兵の方はならびなき國なりとめでけれど、子死にければ何にかはせむ。

或上達部中將時逢召人事

今は昔、上達部のまだ中將と申しける、内へ参り給ふ道に法師を捕へていきけるを、「この法師ぞ」と問はせければ「年比使はれて候ふ主を殺して候ふ者なり」といひければ「誠に罪重きわざなたる者にこそ。心愛さわざしけるものかな」と何となくうち言ひて過ぎ給ひけるに、この法師赤き眼なる目の、ゆゑしく悪しげなるして睨み上げたりければ、よしなき事をも言ひてけるかなと氣疎くおぼしめして過ぎ給ひけるに、又男をからめていきけるに「これは何事なたるものぞ」とこりすまに問ひければ「人の家に追ひ入れられて候ひつる男は逃げ

て罷りぬればこれを捕へて罷るなり」といひければ「別の事もなきものにこそ」とて、その捕へたる人を見知りたれば乞ひ許して遣り給ふ。大方この心さまして人の悲しきめを見るに従ひて助け給ひける人にて、初の法師も事よろしくは免さむとて問ひ給ひけるに、罪の殊の外に重ければさの給ひけるを法師は安からず思ひける。さてほどなく大敵のありければ法師もゆりにけり。さて月明かりける夜皆人はまかであるは寝いりなどしけるを、この中將月にめで竹み給ひける程に、物のついでを越えておりけると見給ふ程に、うしろよりかき掬ひて飛ぶやうにして出でぬ。あきれ感ひていかにも思し分かぬ程に恐しげなる者來集ひて、造なる山の險しく恐しき所へぬて行きて柴のあみたるやうなるものを高く造りたるにさし置きて「さかしらする人はかくぞする。やすき事は偏に罪重く言ひなして悲しき目を見せしかば、そのたうに疾り殺さむするぞ」とて火を山の如くおきければ、夢などを見る心ちして若くさびはなる程にてはあり、物おぼえ給はず。あつさはたあつになりて唯片時に死ぬべく覺え給ひけるに、山の上よりゆゑしき鏑矢を射おこせければ、ある者ども「こは如何に」と騒ぎけるほどに、雨の降るやうに射ければ、これら暫し此の方よりも射けれど、あなたには人の數多くえ射あふくもなかりけるにや、火の行くへも知らず射ちらされて逃げていけり。その折男一人出で来て「如何に恐ろしくおぼしめしつらむ。おのれはその月のその日堀められて罷りしを、御徳に免されて世にうれしくこの御恩報い参らせばやと思ひ候ひつるに、法師の事は悪しく仰せられたりとて口比伺ひ参らせつるを見て候ふ程に、告げ参らせば

やと思ひながら、我が身かくて候へばと思ひつる程に、あからさまにまこと立ち離れ参らせ候ひつる程に、かく候ひつれば、ついでを越えて出で候ひつるに、逢ひ参らせて候ひつれども、そこにて取り参らせ候は、殿も御班などもや候はむすらむと思ひて、こゝにてかく射拂ひて取り参らせ候ひつるなり」とて、それより馬にかき載せ申して、儘にもとの所へ送り申してんけり。ほのぼのと明るるほどにぞ歸り給ひける。年おとなになり給ひてかゝる事にこそ逢ひたりしかと人に語り給ひけるなり。四條大納言の事と申すはまことやらむ。

陽成院妖物の事

今は昔、陽成院おりのせ給ひての御所は、大宮よりは北、西洞院よりは西、油小路よりは東にてなむありける。そこはものすむ所になむありける。大きな池のありける釣殿に番の者寝たりければ、夜中ばかりに細々とある手にてこの男が顔をそとそと撫でけり。けむつかしと思ひて太刀を抜きて片手にて握みたりければ、淺黄の上下着たる叟の殊の外に物侘しげなるがひふやう「我はこれ昔住みしぬしなり。浦島が子が弟なり。古へよりこの所に住みて千二百餘年になるなり。願くは許し給へ。こゝに社を建て、齋ひ給へ。さらばいかにも守り奉らむ」といひけるを「我が心一つにてはかなはじ。このよしを院へ申してこそは」といひければ「にくき男のいひごとかなとて、三度上さまへけあけあけしてなえなえくたくとなして落つる所を口をあきてくひたりけり。なべての人とはなる男と見る程に、夥しく大きになりてこの男を一口にくひてけり。

水無瀬殿むさびの事

後鳥羽院御時、水無瀬殿による山より傘ほどの物の光りて御堂へ飛び入る事侍りけり。西おもて北おもてのものとも面々にこれを見顯して高名せむと心にかけて用心し侍りけれども、空しくのみ過ぎけるに、或夜かげかた唯一人中島に寝て待ちけるに、例の光物山より池の上を飛び行きけるに、起きむ心もとなくてあふのきに寝ながらよく引きて射たりければ、てごたへして池へ落ち入るものありけり。その後人々に告げて、火を燈して面々見れば、ゆゝしく大きなむさびの年ふり毛赤どもはげまぶとげなるにてぞ侍りける。

一條棧敷屋鬼の事

今は昔、一條棧敷屋に或男とまりてけいせいといと臥したりけるに、夜中はかりに風吹き雨降りてすさまじかりけるに、大路に「諸行無常」と詠じて過ぐる者あり。何者ならむと思ひて蒔を少し押しあけて見ければ、長は軒とひとしく馬の頭なる鬼なりけり。おそろしさに蒔をわけて奥の方へ入りたれば、この鬼格子押しあけて顔をさし入れて「よく御覽じつるな御覽じつるな」と申しければ、太刀を抜きて入らば斬らむと構へて女をばそばに置きて待ちけるに「よくよく御覽せよ」と言ひてうにけり。百鬼夜行にてあるやらむとおそろしかりける。それより一條の棧敷には又もとまらざりけるとならむ。

宇治拾遺物語卷第十三

上緒主得金事

元輔落馬の事

俊宣迷神にあふ事

かめを買ひてはなす事

夢買人の事

大井光遠妹強力の事

或唐人女のひつじにうまれたる不知して殺す事

出雲守別當の鯨に成りたるをまらながらころして食ふ事

念佛僧魔往生事

慈覺大師入瀬瀬城給事

渡天僧入穴事

寂照上人飛鉢事

清瀧川聖の事

優姿堀多弟子の事

上緒主得金事

今は昔、兵衛佐なる人ありけり。冠のあげをの長かきければ世の人あげをのぬしとなひつけ

たりける。西の八條と京極との島の中にあやしの小家あり。その前を行くほどに夕立のまげればこの家に馬より下りて入りぬ。見れば女一人あり。馬をひき入れて夕立をすすすとてひらなる小辛櫃のやうなる石のゐるに尻をうちかけて居たり。小石を持ちてこの石を手まさぐりに叩き居たれば、打たれて窪みたる所を見れば金色になりぬ。希有の事かと思ひてはげたる所に土を塗り隠して女に問ふやう「この石は何の石ぞ」。女のいふ様「何の石にか侍らむ。昔よりかくて侍るなり。昔長者の家なむ侍りける。この家は倉どもの跡にて候ふなりと。誠に見れば大きな礎の石どもあり。さてその尻かけさせ給へる石はその倉の跡を島に作るるとて堀堀る間に土の下より堀り出されて侍るなり。それがかく屋の内に侍れば掻きのけむと思ひ侍れど、女は力弱し掻きのくへさやうもなければ憎む憎むかくて置きて侍るなり」といひければ、我この石取りてむ。後に目くせあるものも見つくと思ひて、女にいふやう「この石我取りてむよ」と言ひければ「よき事に侍り」といひければ、その邊に知りたる下人のむき車を借りてやりて積みて出でむとするほどに、綿絹を脱ぎて唯にとらむが罪えがましければ、この女に取らせつ。心もえでなわきまどふ。「この石は女どもこそよしなし物とも思たれども、我が家にもていきて使ふべきやうのあるならざれば唯に取らむが罪えがましければかく衣を取らするなり」といへば「思ひがけぬことなり。不用の石のかはりにいみじき寶の御ぞの綿のいみじき賜はらむ物とはあな恐ろし」といひて竿のあるに掛けてをがむ。さて車にかき載せて家に歸りてうちかきうちかき賣りて物どもを買ふに、米錢絹綾など

數多に賣りえて夥しき徳人になりぬれば、西の四條よりは北、皇嘉門よりは西、人も住まぬうきのゆふゆふとしたる。一町ばかりなるうきあり。そこは買ふとさきも價もせじと思ひて唯少しに買ひつ。ぬしは不用なきなれど島にも作らるまじ家も完建つまじ、やくなき所と思ふに價少しにても買はむといふ人をいみじきさきものと思ふに賣りつ。上緒のぬし、このうきを買ひ取りて津の國に行きぬ。船四五艘ばかり具して難波わたりにいぬ。酒粥など多く設けて鎌又多う設けたり。行きかふ人を招き集めて「この酒粥參れ」といひてその代りにこの葦刈りて少しづつ得させよ」といひければ喜びて集まりつ、四五束十束二十束など刈りて取らず。斯の如く三四日刈らすれば山の如く刈りつ。船十艘ばかりに積み京へのぼる。酒多く設けたれば上るまゝにこの下人共に「唯にいかにむよりはこの綱手引け」といひければこの酒を飲みつ、綱手を引きていとく賀茂河尻に引きつけつ。其より車借りに物をとらせつ、その葦にてこの内に敷きて、下人どもを雇ひてその上に土はねかけて家を思ふまゝに造りてけり。南の町は大納言源貞といひける人の家、北の町はこの上緒のぬしのうめて造りける家なり。其をこの貞の大納言の買ひ取りて二町にはなしたるなりけり。それいはゆる此の頃の西宮なり。かくいふ女の家なりける金の石を取りて其を本體として造りたりけるなり。

元輔落馬の事

今は昔、歌よみの元輔内藏亮になりて賀茂祭の使しけるに、一條大路わたりける程に殿上人の車多く列べ立て、物見ける前渡る程に、おいらかにては渡らで、人見給ふにと思ひて馬を

いたくゆふりければ馬狂ひて落ちぬ。年老いたる者の頭を倒れて落ちぬ。公達わなみじと見る程にいとく起きぬればかぶりぬげにけり。髻のゆなし。唯はときをかつきたるやうにてなむありける。馬ぞひ手感ひをしてかぶりを取りてさせさすれど、後ざまにかきて「わな騒がし。きばし待て。公達に聞ゆべき事あり」とて殿上人どもの車の前に歩みよる。日のさしたるに頭さくららとてしていみじう見苦し。大路の者、市をなして笑ひ罵る事限なし。車棧敷の者ども笑ひ罵るに、「一の車の方さまに歩みよりていふやう」公達この馬より落ちてかぶり落したるをば、をこなりとや思ひ給ふ。まか思ひ給ふまじ。その故は心ばせある人だにも物に墮き倒るゝ事は常の事なり。まして馬は心あるものにあらず。この大路はいみじう石高し。馬は口をばりたれば歩まじと思ふだに歩まれます。とひきかうひさくるめかせば倒れむとす。馬をわしと思ふべきにあらず。唐鞍は更なる鏡のかくうへくもあらず。それに馬はいたく躓けば落ちぬ。それわるからず。又かぶりの落つる事は物してゆふものにあらず。髪をよくかさ入れたるに捕へらるゝものなり。それに髪は失せわたればひたぶるになし。されば落ちむ事、かぶり怨むべきやうなし。又例なきにあらず。何のおとひは大嘗會の御禊に落つ。何の中納言はその時の行幸に落つ。かくの如くの例も考へやるべからず。然れば案内も知り給はぬ此の頃の若き君達笑ひ給ふべきにあらず。笑ひ給はるゝをこなるべし」とて車毎に手を折りつゝ敷へて言ひ聞かす。かくの如く言ひはて、「かぶり持てこ」といひてなむ、取りてさし入れける。その時にとよみて笑ひ罵る事限りなし。かぶりせとすとてよみて馬ぞひのうはく

「落ち給ふ即ちかぶりを奉らでなくよしなし事は仰せらるゝぞ」と問ひければ「まればとなひひそ。かく道理をいひ聞かせたらばこそ、この公達は後々にも笑はざらめ。さらすば口さがなき君達は長く笑ひなむものをや」とぞいひける。人笑はする事役にするなりけり。

俊宣迷神にあふ事

今は昔、三條院の八幡の行幸に左京屬にてくくの俊信といふ者の供奉したりけるに、長岡に寺戸といふ所の程いさけるに、人どもの「この邊には迷神あんなる邊ぞかし」といひつゝ、わたる程に「俊のぶもさ聞くは」と言ひて行く程に、過ぎもやらで日もやうやうさがれば、今は山崎のわたりには行きつきぬべきに、あやしう同じ長岡の邊を過ぎて乙訓の川つらと過ぐと思へば、又寺戸の岸をのぼる。寺戸過ぎて又行きもてゆきて乙訓川のつらに來て渡るぞと思へば又少しかつら川を渡る。やうやう日も暮方になりぬ。まらさき見れば人一人も見えずなりぬ。まらさきに遙にうち續きたる人も見えず。夜の更けぬれば寺戸の西の方なる板屋の軒におりて夜を明してつとめて思へば、我は左京の官人なり、九條にてとまるべきにかうまで來つらむ、極まりてよしなし、それに同じ所を夜一夜めぐり歩きけるは、九條の程よりまよはかし神のつきて出で來るをまらでかうしてけるなめりと思ひてなむ西京の家には歸り來たりける。俊のぶがまらさしう語りし事なり。

かめを買ひてはなす事

昔、天竺の人寶を買はむ爲に錢五十貫を子にもたせてやる。大きな河のはたを行くに、舟

に乗りたる人あり。舟の方を見やれば船より龜首をさし出したたり。錢持ちたる人立ちとまると「この龜をば何の料ぞ」といへば、殺して物にせむする」といふ。その龜買はむ」といへば、この舟の人はいはく「いみじく大切の事ありて設けたる龜なれば、いみじき價なりとも賣るまじきよしをいへば、猶わながら手にすりてこの五十貫の錢にて龜を買ひ取りて放ちつ。心に思ふやう、親の賣かひに隣の國へ遣りつる錢を、龜に代へて止みぬれば、親いかに腹立ち給はむすらむ、さりとて又親の許へいかであるべきにあらねば親の許へ歸り行くに、道に人のぬていふやう「こゝに龜賣りつる人は、この下の渡りにて舟うちかへして」と語るを聞きて、親の家へ歸り行きて錢は龜に代へつるよし語らむと思ふ程に、親のいふやう「何とてこの錢をば返しおこせたるぞ」といへば、子のいふ「さることなし。その錢にてはまかじか龜に代へてゆるしつれば、そのよしを申さむとて参りつるなり」といへば、親のいふやう「黒き衣きたる人おちとまなるが、五人各十貫つゝ持ちて來たりつる。これをなむ」といへば、黒き衣きたる人おちとまぬれながらあり。ばや買ひて放しつる龜の、その錢河に落ちるを見て取り持ちて親の許に子の歸らぬさまに遣りけるなり。

夢買人の事

昔、備中國に郡司ありけり。それが子にひきのまき人といふありけり。若き男にてありける時、夢を見たりければ合せさせむとて、夢とき女の許に行きて夢合せて後物語して居たる程に、人々數多聲してくなり。國守の御子の太郎君のおはするなりけり。年は十七八ばかり

の男にて坐しけり。心ばへは知らず。かたちは清げなり。人四五人ばかり具したり。「これや夢解の女の許」と問へば、御供の侍「これにて候ふ」と言ひてくれば、まき人は上の方の内に入りて部屋のあるに入りて穴より覗きて見れば、この君入り給ひて「夢をまかじか見つるなり。いかなるぞ」とて語り聞かす。女聞きて「世にいみじき夢なり。必ず大臣までなりあがり給ふべきなり。返す返すめでたく御覽じて候ふ。あなかしこ、あなかしこ、人に語り給ふな」と申しければ、この君嬉しげにて衣を脱ぎて女に取らせて遣りぬ。その折まき人部屋より出で、女にいふやう「夢はとるといふ事のあるなり。この君の御夢我等に取らせ給へ。國守は四年過ぎぬれば歸り上りぬ。我は國人なればいつもながらへてあらむずる上に、郡司の子にてあれば、我をこそ大事に思はめ」といへば、女のたまはむに侍るべし。さらばおはしつる君の如くにして入り給ひてその語られたる夢を露もたがはず語り給へ」といへば、まき人喜びて、かの君のありつるやうに入り來て夢語をしたれば、女同じやうにいふ。まき人いと嬉しく思ひて、衣を脱ぎて取らせて去りぬ。その後文を習ひ讀みたれば唯通りに通りて才ある人になりぬ。おはやけ開しめして心みらるゝに誠に才深くありければもろこしへ「物よくよく習へ」とて遣して久しく唐土にありて様々の事ども習ひ傳へて歸りたりければ、帝賢さまものに思しめして、次第になしあげ給ひて大臣までになされにけり。されば夢取る事はげにかしこき事なり。かの夢取られたりし備中守の子は司もなきものにて止みにけり。夢をとられざらましかば大臣までもなりなまし。されば夢を人に聞かすまじきなりと言ひ傳へけり。

大井光遠妹強力の事

今は昔、甲斐國の相模大井光遠はひきふとにかめしく力強く足はやくみめ事がらより始めていみじかりし相撲なり。それが妹に年廿六七ばかりなる女のみめことからけはひもよく姿もほそやかなるありけり。それはのきたる家に住みけるに、それが門に人に逐はれたる男の刀を抜きて走り入りて、この女を質に取りて腹に刀をさしあて、居ぬ人走り行きてせうとの光遠に「姫君は質に取られ給ひぬ」と告げれば、光遠がいふやう「そのおもとと薩摩の氏長ばかりこそは質に取らぬ」といひて何となく居たれば、告げつるをのこ怪しと思ひて立ち返りて物よりのぞけば、九月ばかりの事なれば薄色の衣一重に紅葉の袴をきて口おはひして居たり。男は大きなるをこの恐ろしげなるが、大の刀を逆手に取りて、腹にさし當て、足をもてうしろより抱きて居たり。この姫君左の手して顔をふたぎてなく。右の手しては前に矢筈の荒作りたるが二十ばかりあるを取りて手ずさみに節の本を指にて板敷に押し當て、にじれば、朽木の柔なるを押し碎くやうに碎くるを、この盗人目をつけて見るに、あさましくなりぬ。いみじからむせうとの主かな、梶を持ちてうち碎くともかくはあらじ、ゆゑしかりける力かき、このやうにては唯今のまに我は取り碎かれぬべし、無やくなり、逃げなむと思ひて人目をばかりて飛び出で、逃げ走る時に、末に人ども走り逢ひて捕へつ。縛りて光遠が許へ具して行きぬ。光遠「いかに思ひて逃げつるぞ」と問へば、申すやう「大きなる矢筈の節を朽木などのやうに押し碎き給ひつるをあさましと思ひて恐ろしさに逃げ候

ひつるなり」と申せば、光遠うち笑ひて「いかなりともその御許はよもつかれじ。突かむとせむ手を取りてかひねぢてかみぎまへつかば、肩の骨は上ぎまへ出で、ねぢられなまし。かしこくおのれがかひなぬかれまし。宿世ありて御許は捨ぢりけるなり。光遠だにもおれをば手殺に殺してむ。かひなをば捨ぢて腹胸をふまむに、おのれは生きてむや。それにかの御許の力は光遠二人ばかり合せたる力にておはするものを、さこそ細やかに女めかしくおはすれども光遠が手戯れするに捕へたるうでを捕へられぬれば、手廣よりて免しつべきものを、おはれをのこ子にておらましかば、逢ふかたきもなくぞあらし。口惜しく女にてある」といふを聞くに、この盗人死ぬべき心ちす。女と思ひていみじき質を取りたると思ひてあれどもその儀はなし。「おれをば殺すべけれど御許の死ぬべくばこそ殺さぬ。おれ死ぬべかりけるにかしこく疾く逃げてのきたるよ。大きな鹿の角を膝に當て、小さから木の細きなどを折るやうにをるものを」と追ひ放してやりける。

或唐人女のひつじにうまれたる嘘不知して殺す事

今は昔、もろこしに何とかいふ司になりて下らむとする者侍りき。名をばけいそくといふ。それがむすめ一人ありけり。雙びなくをかしげなりし。十餘歳にして失せにけり。父母泣き悲む事かぎりなし。さて二年ばかりありて田舎に下りて親しき一家の類はらから集めて國へ下るべきよしを言ひ侍らむとするに、市より羊を買ひ取りてこの人々にくはせむとするに、その母が夢に見るやう、うせにしむすめ青き衣を着て白きさいでして頭を包みて髪に

玉の簪一よそひをさして來たり。生きたりし折に變らず。母にいふやう、「我生きて侍りし時に、父母我を悲しう去給ひて萬をまかせ給へりしかば、親に申さで物を取り使ひ又人にも取らせ侍りき。ぬすみにはあらねと申さでせし罪によりて今羊の身を受けたり。來たりてそのはらうを盡し侍らむとす。明日まきに頸白き羊になりて殺されむとす。願はくは我が命を許し給へ」といふと見ゆ。驚きてつとめて食物する所を見ればまことに青き羊の頸白きあり。脛せなかくて頭に二つの斑あり。常の人の簪さす所なり。母これを見て「暫しこの羊な殺しそ。殿歸りおはしての後に案内申して免さむするぞ」といふに、守殿物より歸りて「など人々參物は遅き」とてむつかる。「さればこの羊を調じ侍りてよそはむとするに、うへの御前暫しな殺しそ殿に申して免さむとて、留め給へば」などいへば、腹立ちて「僻事なせそ」とて殺さむとて釣りつけたるに、このまらう人ども來て見ればいとをかしげにて、顔よき女子の十餘歳ばかりなるを、髪に纏つけて釣りつけたり。この女子のいふやう「童はこの守の女にて侍りしが羊になりて侍るなり。今日の命を御前たち助けたまへ」といふに、この人々「あなかしこ、あなかしこ、ゆめゆめころすな。申して來む」とて行くほどに、この食物する人は例の羊と見ゆ。「定めて遅しと腹立てなむ」とて打ち殺しつ。その羊の泣く聲、この殺す者の耳には唯常の羊の泣く聲なり。さて羊を殺して煎り焼きまじまに去たりけれど、このまらうどもは物もくはで歸りにけり。怪しがりて人々に問へば、まかじかなりと始より語りければ悲みて感ひけるほどに、病になりて死に、ければ田舎にも下り侍らずなりにけり。

出雲守別當の餘に成りたるをえりながらころして食ふ事

今は昔、王城の北上つ出雲寺といふ寺建て、より後年久しくなりて御堂も傾ぶきて、はかばかしく修理する人もなし。この近う別當侍りき。その名をば上覺となむいひける。これぞさきの別當の子に侍りける。あひ續きつゝ、妻子もたる法師を知り侍りける。いよいよ寺は毀れて荒れ侍りける。さるは傳教大師のもろこしにて天台宗建てむ所を擇び給ひけるに、この寺の所をば繪に書きて遣しける。高雄比叡山かむつ寺と三つの中にいづれかよかるべきとあれば、「この寺後は人にすぐれてめでたけれど、僧なむらうがはしかるべき」とありければ、それによりて留めたる所なり。いとやんごとなき所なれど如何なるにかさなりはて、わろく侍るなり。それに上覺が夢に見るやう、我が父の前の別當いみじう老いて杖つきて出で來ていふやう「あさて未時に大風吹きてこの寺倒れなむとす。まかるに我この寺の瓦の下に三尺ばかりの餘にてなむ行く方なく水も少なくせば、暗き所にありてあさましう苦しき目になむ見る。寺倒ればこぼれて庭に這ひありかば、童部うち殺してむとす。その時汝が前に行かむとす。童部にうたせずして賀茂河に放ちてよ。さらば廣きめも見む。大水に行きて頼もしくなむあるべき」といふ。夢覺めて「かゝる夢をこそ見つれ」と語れば、「如何なる事にか」といひて日暮れぬ。その日になりて午の時の末より俄に空かき曇りて木を折り家を破る風出で來ぬ。人々あわて、家ども繕ひ騒げども風いよいよ吹きまざりて村里の家ども皆吹き倒し、野山の竹木倒れ折れぬ。この寺誠に未時ばかりに吹き倒されぬ。柱折れ棟崩れてすぢ

なし。さる程に裏板の中に年比の雨水溜りけるに大なる魚ども多かり。そのわたりの者ども桶をさげて皆かき入れ騒ぐほどに、三尺ばかりなる餘のふたふたとして庭にはひ出でたり。夢の如く上覺が前に來ぬるを、上覺思ひもあへず、魚の大きに樂しげなるに耽りてかな杖の大きなるをもちて頭につき立て、我が太郎童部を呼びて「これ」といひければ、魚大きにてうち取られねば草刈鎌といふものを持ちて、あざとを掻き切りて物に包ませて家にもていりぬ。さてこと魚など去た、めて桶に入れて女どもに戴かせて我が坊に歸りたれば、妻の女「この餘は夢に見えける魚にこそあめれ。何しに殺し給へるぞ」と心愛がれど、「こと童部の殺さましも同じ事あへなむ。我はなど」といひてこと人ませす。「太郎次郎童など食ひたらむをぞ、故御房はうれしとおぼさむ」とて、つぶつぶと切り入れて煮て食ひて怪しういかなるにか、こと餘よりも味のよきは、故御房のまゝむらなればよきなめり。これが汁すれなど愛して食ひけるほどに、大きな骨喉にたて、「あうらう」といひける程に、とみに出でざりければ苦痛して終に死に侍り。妻はゆゑしがらて餘をばくはすなりにけりとなむ。

念佛僧魔往生事

昔、美濃國伊吹山に久しく行ひける聖ありけり。阿彌陀佛より外の事まらず。他事なく念佛申してぞ年經にける。夜ふかく佛の御前に念佛申して居たるに、空に聲ありて告げていはく「汝ねんごろに我をたのめり。今は念佛の數多く積りたれば明日の未の時に必ず必ず來りて迎ふべし。ゆめゆめ念佛怠るべからず」といふ。その聲を聞きて限なくねんごろに念佛申し

て、水を浴み香をたき花をちらして弟子どもに念佛諸共に申させて西に向ひて居たり。やうやう閃くやうにするものあり。手をすりて念佛申して見れば、佛の御身より金色の光を放ちてさし入りたり。秋の月の雲間より顯れ出でたるが如し。様々の花を降らし白毫の光聖の身を照す。この時聖屍をさかさまになして拜み入る。すいの緒も切れぬべし。觀音蓮臺をさしあげて聖の前により給ふに、紫雲厚くたなびき聖這ひ寄りて蓮臺に乗りぬ。さて西の方へ去り給ひぬ。さて坊に残れる弟子どももなくたふとがりて聖の後世を弔ひけり。かくて七八日過ぎて後坊の下す法師ばら、念佛の僧に湯わかしてあむせ奉らむとて木こりに奥山に入りたりけるに、遙なる瀧にさし掩ひたる栢の木あり。その木の梢に叫ぶ聲しけり。怪しくて見上げたれば法師をはだかになして梢に縛りつけたり。木のほりよくする法師登りて見れば、極樂へ迎へられ給ひし我が師の聖を蘿にて縛りつけて置きたり。この法師「いかに我が師はかゝる目をば御覽するぞ」とて、寄りて繩を解きければ「今迎へむするぞ。その程暫しかく居たれとて、佛のおはしまし、をば何しにかく解き免すぞ」といひければ、寄りて解きければ、「阿彌陀佛は我を殺す人あり。をうをう」とぞ叫びける。されども法師ばら數多登りて解きおろして坊へ具して行きたれば、弟子ども心憂き事なりと歎き慰ひけり。聖は人心もあくて二日三日ばかりありて死にけり。智慧なき聖はかく天狗にあざむかれけるなり。

慈覺大師入續續城給事

昔、慈覺大師佛法を習ひ傳へむとて、もろこしへ渡り給ひておはしける程に、會昌年中に唐

武宗佛法を亡して堂塔を毀ち僧尼を捕へて失ひ或は遠俗せしめ給ふ亂に逢ひ給へり。大師をも捕へひとまけるほどに、逃げて或堂の内へ入り給ひぬ。その使堂へ入りて搜しける間大師すべき方なくて佛の中に逃げ入りて不動を念じ給ひけるほどに、使もとめけるに新しき不動尊佛の御中におはしけり。それあやしがりて抱きおろして見るに、大師もとの姿になり給ひぬ。使驚きて帝にこのよし奏す。帝仰せられけるは「ことごとくの聖なり。速に追ひ放つべし」と仰せければ、放ちつ。大師喜びてことごとくに逃げて給ふに、遙なる山を隔て、人の家あり。ついで高くつさめぐらして一つの門あり。そこに人立てり。悦をなして問ひ給ふに、これは一人の長者の家なり。「わ僧は何人ぞ」と問ふ。答へていはく「日本國より佛法習ひ傳へむとて渡れる僧なり。まかるにかくあさましき亂れに逢ひて暫しかくれてあらむと思ふなり」といふに「これはおぼろげに人の來たらぬ所あり。暫くこゝにおはして世をまじりて後出で、佛法も習ひ給へ」といへば、大師喜びをなして内へ入りぬれば、門をさしかためて奥のかたに入るに、尻に立ちて行き見て見れば様々のやども造りついでて人多くさわがし。傍なる所にすゑつ。さて佛法習ひつべき所やあると見ありき給ふに佛經僧侶等凡て見えす。うしろの方山によりて一宅あり。寄りて聞けば人のうめく聲あまたす。怪しくて垣のひまより見給へば人を縛りて上より釣り下げて下に壺どもを据えて血を垂し入る。あさましくて故と問へどもいらへもせず。大きに怪しくて又こと所を聞けばおなじくによふ音す。のぞきて見れば色あさましう青びれたるものどものやせげんじたるあまた臥せり。一人を招き寄せて「これ

はいかなる事ぞ。かやうに堪へ難げにはいかであるぞ」と問へば、木の切を持ちて細きかひなをさし出で、土に書くを見れば「これは頼頼城なり。これへ來たる人にはまづ物言はぬ藥をくはせて次に肥ゆる藥をくはす。さてその後高き所に釣り下げて所々を刺し切りて血をあやしてその血にて頼頼を染めて賣り侍るなり。これを知らずしてかゝる目を見るなり。食物の中に胡麻のやうにて黒ばみたる物あり。それは物言はぬ藥なり。さる物參らせたらばくふまねをして捨て給へ。さて人の物申さばうめきのみうめき給へ。さて後にいかにもして逃ぐべき支度をして逃げ給へ。門は堅くさしておぼろげにて逃ぐべきやうなし」と委しく教へければ、ありつる居所に歸り居給ひぬ。さる程に人食物持ちて來たり。教へつるやうにけしきのある物中にあり。くふやうにして懐に入れて後にすてつ。人きたりて物を問へばうめきて物ものたまはず。今はまおほせたりと思ひて肥ゆべき藥を様々にしてくはすれば、同じくくふまねしてくはす。人の立ち去りたるひまに良の方に向ひて「我が山の三寶助け給へ」と手を摺りて祈請し給ふに、大きな犬一疋出て來て大師の御袖をくひて引く。やうありと覺えて引く方に出で給ふに、思ひかけぬ水門のあるより引き出しつ。外に出でぬれば犬はうせにけり。今はかうとおぼして足の向きたる方へ走り給ふ。遙に山を越えて人里あり。人あひて「これはいつ方よりはおはする人のかくは走り給ふぞ」と問ひければ「かゝる所へ行きたりつるが逃げて罷るなり」とのたまふに「おはれあさましかりける事かな。それは頼頼城なり。かしてへ行きぬる人の歸るとなし。臆げならぬ佛の御助ならでは出づべきやうなし。哀

れたふとくおはしける人かな」とて拜みて去りぬ。それよりいよいよにげのきて又都へ入りて忍びておはするに、會昌六年に武宗崩し給ひぬ。翌年中元年宣宗位に即き給ひて佛法滅すこと止みぬれば、思の如く佛法習ひ給ひて十年といふに日本へ歸り給ひて眞言を弘め給ひけりとまじ。

渡天僧入穴事

今は昔、もろこしにありける僧の天竺に渡りて、他事にあらず唯物のゆかしければ物見にまありきければ所々見ゆきけり。或片山に大きな穴あり。牛のありけるがこの穴に入りけるを見て、ゆかしく覺えければ、牛の行くにつきて僧も入りけり。遙に行きてあかさ所へ出ぬ。見まはせばあらぬ世界と覺えて見も知らぬ花の色いみじきが咲き亂れたり。牛この花を食ひけり。試にこの花を一房取りて食ひたりければ、うまさごと天の甘露も斯あらむと覺えてめでたかりけるまゝに、多く食ひたりければ唯こえにこえ太りけり。心えず恐ろしく思ひてありつる穴の方へ歸り行くに、始はやすく通りつる穴、身の太くなりてせばく覺えてやうやうとして穴の口までは出でたれどもえ出でずして堪へ難き事限なし。前を通る人に「助けよ」とよばはりけれども耳に聞き入るゝ人もなし。助くる人もなかりけり。人の目にもなしたる様にてなむありける。玄奘三藏天竺に渡り給ひたりける日記にこの由記されたり。

寂照上人飛鉢事

今は昔、三河入道寂照といふ人唐土にわたりて後、唐土の王やんとなき聖どもを召し集めて堂を飾りて僧膳をまうけて經を講じ給ひけるに、王のたまはく、「今日の齋筵は手なかの役あるべからず。各我が鉢を飛ばせ遣りて物は受くべし」とのたまふ。その心は日本僧を試みむがためなり。さて諸僧一座より次第に鉢を飛ばせて物を受く。三河入道末座につきたり。その番に當りて鉢を持ちて立たむとす。「いかで鉢をやりてこそ受けめ」とて人を嘲し留めけり。寂照申しけるは「鉢を飛ばすことは別の法を行ひてするわざなり。まかるに寂照いまだこの法を傳へ行はず。日本國においてもこの法行ふ人ありけれど末世に行ふ人なし。いかでか飛ばさむ」と言ひてゐたるに、日本の聖鉢おそしおそしと責めければ、日本の方に向ひて祈念していはく「我が國の三寶神祇助け給へ。耻見せ給ふな」と念じ入りて居たる程に、鉢こまつぶりのやうにくるめきてもろこしの僧の鉢よりも早く飛びて物を受けてかへりぬ。その時王よりはじめてやんとなき人なりとて拜みけるとぞ申し傳へたる。

清瀧川聖の事

今は昔、清瀧川の奥に柴の庵を作りて行ふ僧ありける。水はしき時は水瓶を飛ばして汲みに遣りて飲みけり。年経にければかばかりの行者はあらじと時々慢心起りけり。かゝりける程に我が居たる上さまより水瓶來て水を汲む。如何なる物の又かくはするやらむとそねましく覺えければ、見顯はさむと思ふ程に、例の水瓶飛び來て水を汲みて行く。その時水瓶につきて行きて見るに、水上に五六十町上りて庵見ゆ。行きて見れば三間ばかりなる庵あり。持

佛堂別にいみじく造りたり。誠にいみじうたふとし。物清くすまひたり。庭に楠の木あり。木の下に行通したる跡あり。闕伽棚の下に花がら多く積れり。砌に苦むしたり、神さびたる事かぎりなし。窓のひまよりのぞけば机に經多く巻きさしたるなどあり。不斷香のけぶり満ちけり。よく見れば年七八十ばかりなる僧の尊げなり。五古を握り臙足に押しかゝりて眠り居たり。この聖を心みむと思ひてやはら寄りて火界咒を持ちて加持す。火焰俄に起りて庵につく。聖眠りながら散杖を取りて香水にさしひたして四方にそゝぐ。その時庵の火は消えて我が衣に火をつけてたゞやけに焼く。下の聖大聲を放ちて感ふ時に、上の聖目を見わけて散杖を持ちて下の聖の頭にそゝぐ。その時火消えぬ。上の聖のいはく「何の料にかゝる目を見すぞ」と問ふ。答へていはく「これは年比河のつらに庵を結びて行ひ候ふ修行者にて候ふ。この程水瓶の來て水を汲み候ひつる時にいかなる人のおはしますぞと思ひ候ひて見顯はし奉らむとて参りたり。ちと心み奉らむとて加持しつるなり。御許し候へ。今日よりは御弟子になりて仕へ侍らむ」といふに、聖人は何事いふぞとも思はぬげにてありけりとぞ。下の聖我ばかりたふときものはあらじとけうまんの心のありければ佛の惡みて優る聖を設けて逢はせられけるなりとぞ語り傳へたる。

優婆鞠多弟子の事

今はむかし、天然にはとけの御弟子優婆鞠多といふ聖おはしき。如來滅後百年ばかりありてその聖に弟子ありき。いかなる心ばへを見給ひたりけむ、「女人に近づくとかなかれ。女人

に近づけば生死にめぐる事車輪の如し」と常にいさめ給ひければ、弟子の申さく「如何なることを御覽じてたびたびかやうに承るぞ。我も證果の身に侍れば、ゆめゆめ女に近づくとあるべからず」と申す。餘の弟子ども、この中には殊に貴き人をいかなればかくのたまふらむとわやくしく思ひける程に、この弟子の僧、物へ行くとて河を渡りける時女人出で來ておなじく渡りけるが、たゞ流れに流れて「あらかなし。我を助け給へあの御房」といひければ、師の給ひしことあり、耳に聞き入れじと思ひけるが、唯、流れに浮き沈み流れればいとはしくて寄りて手を取りてひき渡した。手のいと白くふくやかにていとよかりければ、この手を放しえず。女「今は手をはづし給へかし」物恐ろしき物かなと思ひたる氣色にて言ひければ、僧のいはく「先世の契深きことやらむ。極めて志深く思ひ聞ゆ。我が申さむ事聞き給へてむや」といひければ、女答ふ「唯今死ぬべかりつる命を助け給ひたればいかなる事なりとも何しにかはいなみ申さむ」といひければ、うれしと思ひて萩薄の生ひ茂りたる所へ手を取りて「いざ給へ」とて引き入れた。押し伏せてたゞ犯しに犯さむとてまはにはさまりてある折、この女を見れば我が師の尊者あり。あさましく思ひて引きのかむとすれば、優婆鞠多またに強きはさみて「なんの料にこの老法師をばかくはせたりるぞや。これや汝女犯の心なき證果の聖者なる」とのたまひければ、物覺えず恥かしくなりてはさまれたるをのがれむとすれどもすべて強きはさみてはづさず。さてかくのしり給ひければ道行く人集まりて見る。あさましく耻かしき事かぎりなし。かやうに諸人に見せてのち起さ給ひて弟子を捕へて寺へお

はして、鐘を撞き衆會を爲して大衆にこのよし語り給ふ。人々笑ふ事かぎりなし。弟子の僧
生きたるにもあらず、死にたるにもあむず覺えけり。かくの如く罪を懺悔してければ阿那含
果を得つ。尊者方便をめぐらして弟子をたばかりて佛道に入らしめ給ひけり。

宇治拾遺物語卷第十四

海雲比丘弟子童の事

寛朝僧正勇力事

經頼地に逢ふ事

魚養の事

新羅國后金槌事

珠の價无量事

北面女雜使六事

仲胤僧都連歌事

大將愼事

御堂關白御犬晴明等さどくの事

高階俊平が弟入道算術事

海雲比丘弟子童の事

今は昔、海雲比丘道を行きたまふに十餘歲ばかりなる童子道に逢ひぬ。比丘童に問ひていはく「何のれらの童ぞ」とのたまふ。童答へていはく「唯道罷るものにて候ふ」といふ。比丘童は「汝は法華經は讀みたりや」と問へば、童のいはく「法華經と申すらむものこそいまだ名をたにも聞か候はぬ」と申す。比丘童は「さらば我が房に具して行きて法華經教へむ」とのたまへば、童「仰に従ふべし」と申して比丘の御供に行く。五臺山の房に行きつきて法華經を教へ給ふ。經を習ふ程に小僧常に來たりて物語を申す。誰人と知らず比丘ののたまふ「常に來たる小大徳をば童は知りたりや」と、童「知らず」と申す。比丘のいはく「これこそこの山に住み給ふ文珠よ。我に物語しに來給ふなり」と、かやうに教へ給へども童は「文珠といふ事も知らず候ふなり。されば何とも思ひ奉らず」。比丘童にのたまふ「汝ゆめゆめ女人に近づくとなかれ。あたりを拂ひてなる、事なかれ」と、童物へ行く程に葦毛なる馬に乗りたる女人のいみじくけしやうして美しくしが道に逢ひぬ。この女のいはく「われこの馬の口引きたる。道のゆゑしくわしくて落ちぬべく覺ゆるに」といひけれども、童耳にも聞き入れずして行くに、この馬あらだちて女倒に落ちぬ。怨みていはく「我を助けよ。既に死ぬべく覺ゆるなり」といひけれども猶耳に聞き入れず。我が師の女人の傍へ寄る事なかれとのたまひしにと思ひて、五臺山へ歸りて女のありつるやうを比丘に語り申して「されども耳にも聞き入れずして歸りぬ」と申しければ「いみじくまたり。その女は文珠化して汝が心を見給ふにこそある

なれ」とて譽め給ひけり。さる程に童は法華經を一部讀み終へにけり。その時比丘のたまはく「汝法華經を讀みはてぬ。今は法師になりて受戒すべし」とて法師になされぬ。「受戒をば授くべからず。東京に禪定寺にいまする倫法師と申す人此の頃おほやけの宣旨を蒙りて受戒を行ひ給ふ人なり。その人の許へ行き受くべきなり。但し今は汝を見るまじき事のあるなり」とて泣き給ふ事かぎりなし。童の「受戒仕りては則ち歸り参り候ふべし。いかにおぼしめしてかくは仰せ候ふぞ」と、又「いかなればかく泣かせ給ふぞ」と申せば「唯悲しき事のあるなり」とて泣き給ふ。さて童に「戒師の許に行きたらむにいつかたより來たる人ぞと問はば、清冷山の海雲比丘の許よりと申すべきなり」と教へ給ひて、なくなく見送り給ひぬ。童仰に隨ひて倫法師の許に行きて受戒すべきよし申しければ案の如く「いづ方より來たる人ぞ」と問ひければ、教へ給ひつるやう申しければ倫法師驚きて「たふとき事なり」とて禮拜していはく「五臺山には文珠の限り住み給ふ所なり。汝沙彌は海雲比丘の善知識に逢ひて文珠をよく拜み奉りけるにこそありけれ」とてたふとぶ事かぎりなし。さて受戒して五臺山へ歸りて日來のたりつる房の在所を見れば、すべて人の住みたる氣色なし。なくなくちと山を尋ねありけども遂に在所なし。かれは、優婆塞多の弟子の僧かしてけれども心弱く女に近づきけり。これはいとなけれども心強くて女人に近づかず。かるがゆゑに文珠これをかしてさも

寛朝僧正勇力事

今は昔、遍照寺僧正寛朝といふ人仁和寺をもえりければ、仁和寺の破れたる所修理せさすとて番匠ども數多集ひてつくりけり。日暮れて、番匠ども各出で、後に今日の造作はいかほどきたるぞ、問はむと思ひて、僧正中ゆひうちして高足駄はきてたゞ一人歩み來てあがるくひとゆひたるもとに立ちまはりて、なま夕暮に見られけるほどに、黒き裝束したる男の烏帽子引き垂れて顔たしかにも見えずして僧正の前に出で來て、つゝ居て刀を倒に抜きて引き隠したるやうにもてなして居たりければ、僧正「かれは何者ぞ」と問ひけり。男片膝をつきて「わび人にはべり。寒さの堪へ難く侍るにその奉りたる御を一つ二つおろし申さむと思ひ給ふなり」といふまゝに、飛びかゝらなむと思ひたる氣色なりければ「異にもあらぬ事にこそわんなれ。かく恐ろしげに威さすとも唯乞はで、けしからぬぬしの心際かな」といふまゝに、ちゝと立ちめくりて尻をはたと蹴たれば蹴らるゝまゝに（五、四、三、二、一）男かきけちて見えすなりにければ、やはら歩み歸りて坊のもと近く行き「人やある」と高やかに呼びければ、坊より小法師走り來にけり。僧正「行きて火ともしてこよ。こゝに我がさぬ劍がむとしつる男の俄に失せぬるが怪しければ見むと思ふぞ。法師ばら呼び具してこ」との給ひければ、小法師走りかへり「御房ひはぎに逢はせ給ひたり。御房たち参り給へ」と呼ばりければ坊々にありとある僧ども火ともし太刀さけて七八人十人と出で來にけり。「いづくに盗人は候ふぞ」と問ひければ「こゝに居たりつる盗人の我がさぬを劍がむとしつれば、劍がれては寒かりぬべく覺えて尻をほうと蹴たれば失せぬるなり。火を高くともして隠れ居るかと思ふ」とのたまひ

ければ、法師は「をかしくも仰せらるゝかな」とて火をうち振りつゝかみさまを見る程に
あがるくひの中に落ちつまりてえ働かぬ男あり。「かしこにこそ人は見え侍りけれ。番匠に
やあらむと思へども黒き装束したり」といひて登りて見れば、あがるくひの中に落ちはさま
りて身じろくべきやうもなくてうんじがはつくりてあり。逆手に抜きたりける刀は未だ持
ちたり。それを見つけて法師は「寄りて刀と髻をかひなとを取りて、引き揚げておろして
て参りたり。具して坊に歸りて」今より後老法師とてなわなづりそ。いとびんなき事なり」と
いひて、着たりけるさぬの中に綿厚かりけるを脱ぎて取らせて追ひ出して遣りてけり。

経頼蝨に逢ふ事

昔、経頼といひける相撲の家の傍にふる川のありけるが深き淵なる所ありけるに、夏その川
近く木蔭のありければ、帷子ばかり着て中ゆひて足駄はきてまたぶり杖といふものつき、小
童一人具してとかくありさけるが、涼まむとてその淵の傍の木蔭に居にけり。淵青く恐ろし
げにて底も見えず、蘆蕩などいふもの生ひ茂りたりけるを見て汀近く立りけるに、おなた
の岸は六七段ばかりはのさたるらむと見ゆるに、水の漲りてこなたさまに來ければ、何のす
るにかあらむと思ふ程に、此の方の汀近くなりて蝨の頭をさし出でたりければ、この蝨大き
ならむかし、とさまに昇らむとするにやと見立てりける程に、蝨頭をもたげてつくづくとま
もりけり。いかに思ふにかあらむと思ひて、汀一尺ばかりのさてはた近く立ちて見ければ、
暫しばかりまもりまもりて頭を引き入れてけり。さておなたの岸さまに水漲ると見ける程

に又こなたさまに水浪立ちて後蝨の尾を汀よりさし上げて我が立てる方さまにさし寄せけ
れば、この蝨思ふやうのあるにこそとて任せて見立てりければ、猶さし寄せて経頼が足を三
四返ばかり纏ひけり。如何にせむするにかあらむと思ひて立てる程に、纏ひえてさしきしと
引きければ、河に引き入れむとするにこそありければ、その折に知りて踏みつより立てり
ければ、いみじう強く引くと思ふ程にはきたる足駄の齒を踏み折りつ。引き倒されぬべきを
構へて踏み直りて立てれば、強く引くともおろかなり。引き取られぬべく覺ゆるを足を強く
踏み立てければ、片つらに五六寸ばかり足を踏み入れて立てりけり。よく引くなりと思ふ程
に繩などの切るゝやうに切るゝまゝに、水中に血のさつと湧き出づるやうに見えければ、切
れぬるなりけりとて足を引きければ、蝨ひきさして上りけり。その時足に纏ひたる尾を引き
はどきて足を水に洗ひければ、蝨の跡失せざりければ、酒にてぞ洗ふと人の言ひければ酒
とりに遣りて洗ひなどして後に從者共呼ひて尾の方を引きあげさせたりければ、大きなりな
どもおろかなり。切口の大きあたり一尺ばかりあらむとぞ見えける。頭の方のきれを見せに
遣りたりければおなたの岸に大きな木の根のありけるに、頭の方を數多かへり纏ひて尾
をさし起して足を纏ひて引くなりけり。力の劣りて中より切れにけるなめり。我が身の切る
ゝをも知らず引きけむあさましき事なりかし。その後蝨の力の程いくたりばかりの力にか
ありしと試みむとて、大きな繩を蝨の巻きたる所につけて人十人ばかりして引かせてけ
れども「猶足らず足らず」といひて六十人ばかりかゝりて引きける時にぞ、「かばかりぞ覺え

魚養の事

し」といひける。それを思ふに経頼が力はさば百人ばかりが力をもたるにやと覺ゆるなり。

今は昔、遣唐使のもろこしにゐる間に妻を設けて子をうませつ。その子いまだいとけなきはどに日本にかへる。妻に契りていばく「こと遣唐使いかむにつけて消息遣るべし。又この子めのと離れむ程には迎へ取るべし」と契りて歸朝しぬ。母遣唐使のくることに「消息やある」と尋ねれど、あへて音もなし。母大きに恨みてこの兒を抱きて日本へ向きてちこの頸に遣唐使某が子といふ簡を書きて結ひつけて「宿世わらば親子の中は行き逢ひなむ」といひて海に投げ入れて歸りぬ。父或時難波の浦の邊を行くに沖の方に鳥の浮びたるやうに白き物見ゆ。近くなるまゝに見れば童に見なしつ。怪しければ馬をひかへて見ればいと近く寄りくるに、四つばかりなるちこの白くをかしげなる浪につきて寄り來たり。馬をうち寄せて見れば、大きな魚の脊中に乗れり。従者をもちて抱き取らせて見れば頸に札あり。遣唐使それがしが子と書けり。とば我が子にこそありけれ、唐土にて言ひ契りし兒を問はずとて母が腹たちて海に投げ入れてけるが、まかるべき縁ありてかく魚に乗りて來たるなまりと、あはれにおぼえていみじう悲しくて養ふ。遣唐使のいさけるにつけてこのよしを書き遣りたりければ、母も今ははかなきものに思ひけるに、かくと聞きてなむ希有の事なりと喜びける。さてこの子大人になるまゝに手をめでたく書きけり。魚に助けられたりければ名をば魚養とぞつけたりける。七大寺の額どもはこれが書きたるなりけりと。

新羅國后金榻事

これも今は昔、新羅國に后おはしけり。その后忍びてみそかをとてを設けてけり。みかどこのよしを聞き給ひて、后を捕へて髪に繩をつけて上に釣りつけて足を二三尺引きあげて置きたりければ、すべさやうもなくて心の中に思ひ給ひけるやう、かゝる悲しき目を見れども助くる人もなし、傳へて聞けばこの國より東に日本といふ國あり、その國に長谷の觀音と申す佛現し給ふなり、井の御慈悲この國まで聞えてはかりなし、願をかけ奉らばなどは助け給はざらむとて、目を塞ぎて念じ入り給ふ程に、金の榻足の下に出で來ぬ。それをふまへて立てるにすべてくるしみなし。人の見るにはこの榻見えす。日比ありて免され給ひぬ。後に后持ち給へる寶どもを多く使をさして長谷寺に奉り給ふ。その中に大きな鈴鏡かねの簾今にありとぞ。かの觀音念じ奉れば他國の人もまるしを蒙らすといふことなしとなむ。

珠の價无量事

これも今は昔、筑紫に大夫さだまげと申す者ありけり。此の頃ある箱崎の大夫のりまげが祖父なり。そのさだまげ京のぼりしけるに、故宇治殿に參らせ又私の知りたる人々にも心ざむとて、唐人に物を六七千疋が程借るとて太刀を十腰を質におさける。さて京に上りて宇治殿に參らせ思のまゝに私の人々にやりなどして歸り下りけるに、淀にて船に乗りける程に、人まうけまたりければこれらうくひなどして居たりける程に、はし舟にて商するものどもよりきて「そのものや買ふ。かのもはや買ふ」など尋ね問ひける中に「玉をや買ふ」といひける

を聞き入る人もなかりけるに、さだまげが舍人に仕へけるをのこ舟のへに立てりけるが、「こへもておはせ。見む」といひければ袴の腰よりあこやの玉の大きな豆ばかりありけるを
取り出して取らせたりければ、着たりける水干をぬぎて「これに代へてむや」といひければ、
玉のぬしの男まようこくまたりと思ひけるに感ひ取りて船さし放ちていければ、舍人も
高く買ひたるにやと思ひけれども感ひいければ、悔しと思ふ思ふ袴の腰に包みてこと水
干着換へてぞありける。かゝる程に日敷つもり博多といふ所に行き着きにけり。さだまげ
舟より下るまゝに物かしたりし唐人の許に「買はずなかりしぞ。物は多くありし」など
いはむとて行きたりければ、唐人も待ち喜びて酒飲ませなどして物語しける。この玉持のを
のこす唐人に逢ひて「玉を買ふ」といひて袴の腰より玉を取り出で、取らせければ唐人玉
を受け取りて手の上に置きてうち振りて見るまゝに、あさましと思ひたる顔氣色にて「これ
はくらば」と問ひければ、ほしと思ひたる顔氣色を見て「十貫」といひければ、感ひて「十
貫に買はむ」といひけり。まことは二十貫」といひければ、それをも感ひ「買はむ」といひけ
り。さては價高き物にやあらむと思ひて「たへまづ」とこひけるを惜みけれどもいたく乞ひ
ければ、我にもあらで取らせたりければ、「今よく定めて買らむ」とて袴の腰に包みてのきに
ければ、唐人すべきやうもなくさだまげと向ひたる船頭がもとに來て、その事ともなくさ
へづりければこの船頭うちうなづさてさだまげにいふやう、「御すんごの中に玉持ちたる者
あり。その玉取りて賜はらむ」といひければ、さだまげ人を呼びて「この供なる者の中に玉持

ちたる者やある。それ尋ねて呼べ」といひければ、このさへづる唐人走り出で、やがてその
をのこの袖をひかへて「くはこれぞこれを」とて引き出でたりければ、さだまげ「誠に玉や持
ちたる」と問ひければ、誰々にさふらふよしをいひければ、「いでくれよ」と乞はれて、袴の腰
より取り出でたりけるを、さだまげ郎等して取らせけり。それを取りて對ひ居たる唐人手に
入れ受け取りてうち振りて見て立ち走り内に入りぬ。何事にかあらむと見る程にさだまげ
が七十貫賣に置きし太刀どもを十ながら取らせたりければ、さだまげはあきれたるやうに
てぞありける。古水干一つに換へたるものを若干のものに換へて止みにけむ、げにあきれぬ
べき事ぞかし。玉の價は限りなきものといふ事は今始めたる事にはあらず。筑紫にたうしせ
うずといふ者あり。それが語りけるは物へ行さける道にをのこ「玉や買ふ」といひて、反古
の端に包みたる玉を懐より引き出で、取らせたりけるを見れば、木樂子よりも小き玉にて
ぞありける。「これはいくら」と問ひければ「絹二十疋」といひければ、あさましと思ひて物へ
いさけるを留めて、玉持のをのこ具して家に歸りて絹のありけるまゝに六十疋を取らせたり
ける。「これは二十疋のみはすまじきものを少なくいふがいとほしさに六十疋を取らする
なり」といひければをのこ喜びていにけり。その玉を持ちて唐に渡りてけるに道の程恐ろし
かりけれども身をも放たず守などのやうに頸にかけてぞありける。悪しき風の吹きければ
唐人はあしき浪風に逢ひぬれば船の内に一の寶と思ふものを海に入るなるに「このせうず
が玉を海に入れむ」といひければ、せうずがいひけるやうは「この玉を海に入れては生きて

もかひあるまじ。唯我が身ながら入れば入れよ」とて抱へて居たり。さすがに人を入るべきやうもなかりければ、とかく言ひける程に玉失ふまじきはうやありけむ、風なほりにければ喜びて入れずなりにけり。その舟の一の船頭といふ者も大きな玉持ちたりけれども、少しひらにてこの玉には劣りてぞありける。かくて唐に行きつきて玉買はむと言ひける人の許に船頭が玉をこのせうすが持たせてやりける程に、道に落してけり。あきれ騒ぎて歸り求めけれども、いづくにかあらむずと思ひ詫びて、「我が玉を具してその玉落しつればすべき方なし。それが代りにこれを見よ」とて取らせければ、「我が玉はこれには劣りたりつるなり。その玉の代りにこの玉を得たらば罪深かりなむ」とて返しけるぞさすがにこの人に違ひたりける。この國の人ならば取らせらむやは。かくてこの失ひつる玉の事を歎く程に遊の許にいにけり。二人物語しける序に胸を探りて、「など胸は騒ぐぞ」と問ひければ、「まかじぞいひける。さて歸りてのち二日はかりありてこの遊の許より、さしたる事なむ言はむと思ふ。今の程時はさす」と言ひければ、何事かあらむとて急ぎ行きたりけるを、例の入る方よりは入らずしてかくれの方より呼び入れければ、いかなる事にかあらむと思ふ思ふ入りたりければ、「これは若しそれに落したりけむ玉か」とて取り出でたるを見れば、違はずその玉なり。「こはいかに」とあさましく問へば、「こゝに玉買らむとて過ぎつるを、さる事いひしぞかしと思ひて呼び入れて見るに、玉の大きなりつれば、もしさもやと思ひて言ひ留めて呼

ひに遣りつるなり」といふに「事もおろかなり。いづくぞその玉持ちたりつらむ者は」といへば「かしこに居たり」といふを呼び取りて遣りて、玉の主の許にゐて行きて「これはまかじかしてその程に落したりし玉なり」といへば、えあらがはで「その程に見つけたる玉なりけり」とぞいひける。聊なる物取らせて遣りける。さてその玉を返して後唐綾一つをば唐には美濃五疋が程にぞ用ゐるなる。せうすが玉をば唐綾五千段にぞ換へたりける。その價の程を思ふにこゝにては絹六十疋に換へたる玉を、五萬貫に賣りたるにこそあんなれ。それを思へば定重が七十貫が價を返したりけむも驚くべくもなき事にてありけりと人の語りしなり。

北面女雑使六事

これも今は昔、白河院の御時北おもての曹司にうるせき女ありけり。名をば六とぞいひける。殿上人とももてなしけうじけるに、雨うちをばふりて徒然なりける日或人六よびて徒然慰めむとて使を遣りて「六呼びて」といひければ、程もなく「六召して参りて候ふ」といひければ、あなたより内の方へ具して「こゝに候へばひんなく候ふと申して、おそれ申し候ふなり」といへば、つさみていふにこそと思ひて「などかくはいふぞ。唯こといへども僻事にてこそ候ふらめ。先々も内御でゐるなどへ参る事も候はぬに」といひければ、この多く居たる人々「唯参り給へ。用ぞあるらむ」と責めければ「筋なき恐れに候へどもめしにて候へば」とて参る。この主人見やりたれば、刑部録といふ廳官、びんひげに白髪まじりたるがと

くさの狩衣に襖袴きたるがいと事麗しくさやさととなりて、扇を笥に取りて少しうつぶして蹲り居たり。大方いかにいふへしとも覺えず。物もいはねばこの廳官のよき恐れ畏まりてうつぶしたり。主人さてあるべきならねば「や、應にはまた何者か候ふ」といへば「それがしかれがし」といふ。いとげにげにしくもおほえずして廳官うしろをまへすたり行く。この主人「かう宮づかへするこそ神妙なれ。見參には必ず入れむするぞ。どう罷りね」とこそやりけれ。この六、後に聞きて笑ひけるとか。

仲胤僧都連歌事

これも今は昔、青蓮院の座主の許へ七宮渡らせ給ひたりければ、御つれづれ慰め參らせじとて若き僧綱有職など庚申して遊びけるに、上童のいとくさげなるが瓶子取りなどしわりさけるを、或僧忍びやかに「うへわらは大童子にも劣りたり」と連歌にまたりけるを、人々まばし案する程に、仲胤僧都その座にありけるが「や、胤早うつけたり」といひければ、若き僧たち如何にと顔をまもりあひ侍りけるに、仲胤、祇園の御會を待つばかりなり」とつけたりけり。これをおのおの「この連歌はいかにつけたるぞ」と忍びやかに言ひ合ひけるを、仲胤聞きて「や、わたう、連歌だにつかぬとつけたるぞかし」と言ひたりければ、これを聞き傳へたる者ども一度にはつとよみ笑ひけりとか。

大將慎事

これも今は昔、月の大將星を犯すといふ勘文を奉れり。よりに近衛大將重く慎み給ふべしと

て、小野宮右大將はさまたまの御祈どもありて春日社山階寺などにも御祈あまたせらる。その時の左大將は枇杷左大將仲平と申す人にてぞおはしける。東大寺の法藏僧都はこの左大將の御祈の師なり。定めて御祈の事ありなむと待つに、音もま給はねば覺束なきに京にのぼりて枇杷殿に参りぬ。殿逢ひ給ひて「何事にて上られたるぞ」とのたまへば、僧都申しけるや「奈良にてうけ給はれば左右大將慎み給ふべしと天文博士勘へ申したりとて、右大將殿は春日社山階寺などに御祈さまたまに候へば殿よりも定めて候ひなむと思ひ給うて案内つかうまつるに、さる事も承らずと皆々申し候へば、覺束なく思ひ給ひて参り候ひつるなり。猶御祈候はむこそよく候はむ」と申しければ、左大將のたまふやう「尤まかるべきことなり。されどおのが思ふやうは大將の慎むべしとまうすなるに、おのれもつゝしまは右大將のためには悪しうもこそあれ。かの大將は才もかしこくいますかり。年もわかし。長くおほやけに仕うまつるべき人なり。おのれにおきてはさせることなまし。年も老いたり。如何にもなれ何條ことかあらむと思へば祈らぬなり」とのたまひければ、僧都いりるとうち泣きて「百千の御祈にまざるらむこの御心の定にては事のおそり更に候はじ」といひてまかぬ。されば實に事なくて大臣になりて七十餘までなむおはしける。

御堂關白御犬晴明等さどくの事

今は昔、御堂關白殿法成寺を建立し給ひて後は日毎に御堂へ参らせ給ひけるに、白き犬を愛してなむ飼はせ給ひければ、いつも御身を離れず御供しけり。ある日例の如く御供しけるが

門を入らむとし給へば、この犬御さきにふたがるやうに吠えまはりて内へ入れ奉らむとしければ、いかさま用ある事ならむとて榻を召し寄せて御尻をかけて晴明に「さと参れ」とめしに遣したりければ、晴明乃ち参りたり。「かゝる事のあるはいか」と尋ね給ひければ、晴明暫し占ひて申しけるは、「これは君を呪咀し奉りて候ふものを道にうつみて候ふ。御越しおはましかば悪しく候ふべき。犬は通力のものにて告げ申して候ふなり」と申せば、「さてそれはいづくにか埋みたる、あらはせ」とのたまへば「易く候ふ」と申して、暫し占ひて「こゝにて土器を二つうち合せて黄なる紙捻にて十文字にからげたり。開いて見れば中には物もなし。朱砂にて一文字をかはらけの底に書きたるばかりなり。」「晴明が外には知りたる者候はず。若し道摩法師や仕りたるらむ。報して見候はむ」とて、懐より紙を取り出し鳥の姿に引き結びて、呪を誦じかけて空へ投げ上げたれば、忽に白鷺になりて南を指して飛び行きけり。この鳥の落ちつかひ所を見て参れ」とて下部を走らするに、六條坊門萬里小路邊にふりたる家故を問はるゝに「堀河左大臣顯光公のかたらひを得て仕りたり」とぞ申しける。この上は流罪すべけれども道摩が答にはあらず」とて「向後かゝるわざすべからず」とて本國播磨へ追ひ下されにけり。この顯光公は死後に怨靈となりて御堂殿邊へは祟をなされけり。悪靈左府

と名づく云々。犬はいよいよ不便にせさせ給ひけるとなむ。

高階俊平が弟入道算術事

これも今は昔、丹後前司高階俊平といふ者ありけり。後には法師になりて丹後入道とてぞありける。それがおとゝにて司もなくてある者ありけり。そが主のもとに下りて算術にありけるほどに新しく渡りたりける唐人の算いみじくおくありけり。それに逢ひて「算おく事習はむ」といひけれども、初は心にも入れて教へざりけるを、少しおかせて見て「いみじく算おきつゝかりけり。日本にありては何にかはせむ。日本にさんおく道いとしもかしこからぬ所なり。我に具して唐に渡らむといはば教へむ」といひければ「よくだに教へてその道に賢くだにもなりなば言はむにこそ隨はめ。唐に渡りても用ゐられてだにありぬべくは言はむに隨ひて唐にも具せられていかひなむ」と言よく言ひければ、それになむ引かれて心に入れて教へける。教ふるに隨ひて一事を聞きては十事も知るやうになりければ唐人もいみじくめで「我が國にさんおくものは多かれど、汝ばかりこの道に心得たる者はなきなり。必ず我に具して唐へ渡れ」といひければ「更なり言はむに隨はむ」といひけり。「このさんの道には病する人をおさやむる術もあり。又病せぬどもにくしねたしと思ふものを立所におさ殺す術などあるも更に惜みかくさじ、君に傳へむとす。儘に我に具せむといふちかどたてよ」といひければ、まほには立てず。少しは立てなごしければ「猶人殺す術をば唐へ渡らむ舟の中に傳へむ」とてことごとくをばよく教へたりけれども、その一事をばひかへて教へざりけ

り。かゝる程によく習ひ傳へてけり。それに俄に主の事ありて上りければ、その供に上りけるを唐人聞きて留めければ、「いかで年比の君のかゝる事ありて俄にのぼり給はむ送りせではあらむ。思ひ知り給へ。約束をばたがふまじきぞ」などすかしければ、げにと唐人思ひて「さば必ず歸りてこよ。今日明日にても唐へ歸らむと思ふに、君のきたらむを待ちつけて渡らむ」といひければ、その契を深くして京に上りにけり。世の中のすまじきまゝには、やを唐にや渡りなましと思ひければ、京に上りにければ親しき人々に言ひ留められて俊平入道など聞きて制し留めければ、筑紫へたにえいかすなりにけり。この唐人はまばしは待ちけるに音もせざりければ、わざと使おこせて、文を書きて怨みおこせけれども「年老いたる親のあるが今日明日とも知らねばそれがならむやう見はて、いかむと思ふなり」といひやりて行かすなりにければ、暫しこそ待ちければとも謀りけるなりけりと思へば、唐人は唐に歸り渡りてよく呪ひて行きにけり。初はいみじく賢かりける者の、唐人に呪はれて後にはいみじくはうけて物も覚えぬやうにてありければ、まわびて法師になりてけり。入道の君としてはうけはうけとしてさせる事なきものにて、俊平入道が許と山寺などに通ひてぞありける。或時若き女房どもの集まりて庚申しける夜、この入道の君かたすみにはうけたるていに居たりけるを、夜更けくるまゝにねぶたがりて中に若く誇りたる女房のいひけるやう「入道の君こそかゝる人はをかしの物語などもするぞかし。人々笑ひぬべからむ物語し給へ。笑ひて目を覺さむ」といひければ、入道「己は口手づゝにて人の笑ひ給ふばかりの物語はええ侍ら

じ。さもありとも笑はむとたにあらば、笑はかし奉りてむ」と言ひければ「物語はせし、唯笑はかさむとあるは穢業をし給ふが。それは物語よりは優る事にてこそあらめ」とまたしきに笑ひければ「さも侍らす。唯笑はかし奉らむと思ふなり」といひければ「こは何事ぞとく笑はかし給へ。いづらいつら」と責められて、何にかあらむ物持ちて火の明き所へ出で來たりて、何事せむするぞと見れば、算の袋を引き解きてさんをさらさらと出しければ、これを見て女房ども「これをかしの事にてあるか」といひ、いざいざ笑はむ」と嘲るを、いらへもせで算をさらさらと置き居たりけり。置きはて、廣さ七八分ばかりの算のありけるを一つとり出で、手に捧げて「御前たちさばいたく笑ひ給ひて侘び給ふなよ。いざ笑はかし奉らむ」といひければ「その算捧げ給へるこそをこがましくてをかしの何事にて侘ぶばかりは笑はむぞ」などいひあひたりけるに、その八分ばかりの算をおき加ふると見れば、ある人みな、がらすゝるにゑつばに入りにけり。いたく笑ひて留まらむとすれどもかなはず。腹のわた切るゝ心として死ぬべくおぼえければ涙をこぼしすゝかたなくてゑつばに入りたる者ども物をだにえいはで、入道に向ひて手を摺りければ「さればこそ申しつれ。笑ひ飽き給ひぬや」といひければ、うなづきさわきて伏しかへり、笑ふ笑ふ手を摺りければ、よく侘びしめて後に置きたる算をさらさらと押し毀ちたりければ笑ひさめにけり。「今暫しあらましかば死なまし。又かばり堪へ難き事こそなかりつれ」といひあひける。笑ひこうじて集りふして病むやうにぞしける。かゝれば人をおき殺しおき生くる術ありといひけるをも傳へたらましか

ば、いみじからまし」とぞ人もいひける。算の道は恐ろしき事にてぞありけるとなむ。

宇治拾遺物語卷第十五

清見原天皇與大友皇子合戦の事

よりとが胡人見たる事

賀茂祭のかへり武正兼行御覽の事

門部府生海賊射返す事

土佐判官代通清人達して關白殿に奉合事

極樂寺僧施仁王經驗事

伊良綠野世恒毗沙門御下文の事

相應和尚上都卒天事付染殿后奉祈事

仁戒上人往生の事

秦始皇自天竺來僧禁獄事

後の千金の事

盗跖與孔子問答の事

清見原天皇與大友皇子合戦の事

今は昔、天智天皇の御子に大友皇子といふ人ありけり。太政大臣になりて世のまつりごとを行ひてなむありける。心の中に御門うせ給ひなば次の御門には我ならむと思ひ給ひけり。清見原の天皇その時は春宮にておはしましけるが、このけしきを知らせ給ひければ大どもの皇子は時のまつりごとをま、世のおほえも威勢も猛なり、我は春宮にてあれば勢も及ぶべからず、あやまたれなむとおそりおぼして、みかど病つき給ふすまはち、「吉野山の奥に入りて法師になりぬ」と言ひて籠り給ひぬ。その時大どもの皇子に人申しけるは「春宮を吉野山に籠めつるは虎に羽をつけて野に放つものなり。同宮に据ゑてこそ心のまゝにせめ」と申しければ、げにもとおぼして軍を整へて迎へ奉るやうにして殺し奉らむと計り給ふ。この大どものわら子の妻にては春宮の御女ましければ、父の殺され給はむ事を悲み給ひて、いかでこの事告げ申さむとおぼしけれど、すべさやうなかりけるに、思ひ侘ひ給ひて鮎のつゝみ焼のありける腹に、ちひさく文を書きて押し入れて奉り給へり。春宮これを御覽じて、さらでだに恐れおぼしける事なれば、さればこそとて、急ぎ下すの狩衣袴を着給ひて藪沓をはきて宮の人にも知られず、唯一人山を越えて北さまにおはしける程に、山城國田原といふ所へ道も知り給はねば五六日にぞたどるたどるおはしつぎにける。その里人怪しくけはひの氣高く覺えければ高坏に栗を焼き又ゆでなどして參らせたり。その二色の栗を「思ふ事叶ふべくば生ひ出で、木になれ」とて片山の上に埋み給ひぬ。里人これを見て怪しがりてあるしをさして置きつ。そこを出で給ひて志摩國がまへ山に添ひて出で給ひぬ。その國の人怪しがりて問ひ

奉れば「道に迷ひたる人なり。喉乾きたり。水飲ませよ」と仰せられければ大きな釣瓶に水をくみて参らせたりければ喜びて仰せられけるは「汝がどうにこの國の守とはなさむ」とて美濃國へおはしぬ。この國の洲股の渡りに舟もなく立ち給ひたりけるに、女の大きな船に布入れて洗ひけるに「この渡り何ともして渡してむや」との給ひければ、女申しけるは「一昨日大友の大臣の御使といふ者來たりて、渡りの船ども皆取り隠されていにかば、これを渡し奉りたりとも多くの渡りえ過ぎさせ給ふまじ。かく謀りぬる事なれば、今軍責め來らむずらむ、いかりして遁れ給ふべし」といふ。「さてはいかすまじ」との給ひければ、女申しけるは「見奉るやうたりにはいませぬ人にこそ。さらば隠し奉らむ」といひて、湯舟をうつぶしになしてその下に伏せ奉りて上に布を多く置きて水くみかけて洗ひ居たり。まばしばかりありて兵四五百人ばかり來たり。女に問ひてはいく「これより人や渡りつる」といへば、女のいふやう「やごとなき人の、軍千人ばかり具して坐しつる、今は信濃の國には入り給ひぬらむ。いみじき龍のやうなる馬にのりて飛ぶが如くして坐しき。この少勢にては追ひつき給ひたりとも皆殺され給ひなむ。これよりかへりて軍を多く整へてこそ追ひ給はめ」といければ誠に思ひて大どもの皇子の兵引き返しにけり。その後女に仰せられけるは「この邊に軍催さむに出で來なむや」と問ひ給ひければ、女走り惑ひて、その國のむねとある者どもを催し語らふに則ち二三千人兵出で來にけり。それを引き具して大友皇子を追ひ給ふに、近江國大津といふ所に追ひつきて戦ふに、皇子の軍敗れてちりちりに逃げゝる程に、大友皇子遂に山崎

三〇

にて討たれ給ひて頭を取られぬ。それより春宮大和國に歸り坐してなむ位につき給ひけり。田原に埋み給ひし焼栗ゆで栗は形も變らず生ひ出でけり。今に田原の御栗とて奉るなり。志摩の國にて水めさせたる者は高増氏の者なり。さればそれが子孫國守にてはあるなり。その水めしたりし釣瓶は今に薬師寺にあり。洲股の女は不破の明神にてましましけりとなむ。

よりとさが胡人見たる事

今は昔、胡國といふは唐よりもはるかに北と聞くを「奥州の地についきたるにやあらむ」とて宗任法師とて筑紫にありしが語り侍りけるなり。この宗任が父は頼時とてみちの國のえびすにておはやけに順ひ奉らすとて攻めむとせられけるほどに、いにしへより今に至るまでおはやけに勝ち奉る者なし、我は過ぐさと思へども責をのみ蒙ればはるくべき方なきを、おく地より北に見渡さるゝ地あんなり、そこに渡りて有様を見てさてもありぬべき所ならば我に順ふ人のかぎりを皆めて渡して住まむといひて、まづ船一つを調へてそれに行きたりける人々、頼時、厨川の次郎、鳥海の三郎、さては又むつましき郎等ども二十人ばかり食物酒など多く入れて舟を出してければ、いくばくも走らぬ程に見渡しなりければ渡りけり。左右は遙なる葦原ぞありける。大きな川の淺を見つけてその淺にさし入りけり。人や見ゆると見けれども人げもなし。陸にのぼりぬべき所やあると見けれども葦原にて道踏みたる方もなかりければ、若し人げする所やあると川をのぼりさまに七日まで上りにけり。それが唯同じやうなりければあさましきわざかなとて猶十日ばかり上りけれども

人のけはひもせざりけり。三十日ばかり上りけるに地の響くやうにしければ、いかなる事のあるにかとおそろしくて葦原にさし隠れて響くやうにする方をのぞき見れば、胡人と繪に書きたる姿したるもの、赤きものにて頭結ひたるが馬に乗りつれてうち出でたり。これはいかなる者ぞと見るほどに、うち續き數知らず出で來にけり。河原のはたに集まり立ちて聞きも知らぬ事をさへつりあひて河にはらはらとうち入りて渡りたる程に、千騎ばかりやあらむとぞ見えわたる。これが足音の響にて遙に聞えけるなりけり。かちのものをば馬に乗りたる者のそばに引きつけ引きつけて渡りけるをば、唯かちわたりする所なめりに見けり。三十日ばかり上りつるに一所も瀬なかりしかはなれば、かれこそ渡る瀬なりけりと見て人過ぎて後にさし寄せて見れば、同じやうに底ひも知らぬ淵にてなむありける。馬筏を作りて泳がせけるに、かち人はそれに取りつきて渡りけるなるべし。猶上るともはかりもなく覺えければ、恐ろしくてそれよりかへりにけり。さていくばくもなくぞ頼時は失せにける。されば胡國と日本の東のおくの地とはさし逢ひてぞあんなる」と申しける。

賀茂祭のかへり武正兼行御覽の事

これも今は昔、賀茂祭の供に下野武正兼行つかはしたりけり。そのかへり法性寺殿紫野にて御覽じけるに、武正兼行殿下御覽すとまりて殊にひきつくるひて渡りけり。武正殊にけしきしてわたる。次に兼行又わたる。各とりどりに言ひ知らず。殿御覽じて「今一度北へ渡れ」と仰せありければ又北へわたりぬ。さてあるべきならねば又南へ歸り渡るに、この度は兼行

さきに南へ渡りぬ。次に武正渡らむすむと人々待つほどに、武正や久しく見えす。こはいかにと思ふ程に向ひに引きたる輓より東を渡るなりけり。いかにいかにと待ちけるに、輓より冠のこしばかり見えて南へわたりけるを人々「なほすぢなきもの、心きはなり」と譽めけりとか。

門部府生海賊射返す事

これも今は昔、門部の府生といふ舍人ありけり。若く身は貧しくてぞありけるに、まゝきを好みて射けり。夜も射ければ僅なる家の葺板を抜きてともして射けり。妻もこのことをうけず。近邊の人も「あはれよしなき事と給ふものかな」といへども「われ家もなくて射ひは誰も何か苦しかるべき」とて猶葺板をともして射る。これを誘らぬ者一人もなし。かくする程に葺板皆失せぬ。はてにはたるきこまひを割りたきつ。又後には棟うつばり焼きつ。後に桁柱皆割りたき、「これあさましき物のさまかな」と言ひあひたるほどに、板敷下桁までも皆割り焼きて隣の人の家に宿りけるを、家主この人の容體を見るに、この家も毀ちたきなむぞと思ひていとへども「さのみこそあれ。待ち給へ」と言ひて過ぐる程に、よく射るよし聞えありて召し出されて賭弓仕うまつるに、めでたく射ければ叙感ありてはてには相撲の使に下りぬ。よき相撲とも多く催し出でぬ。又數知らず物儲けて上りけるにかはね島といふ所は海賊の集まる所なり。過ぎ行く程に具したる者のいふやう「われ御覽じ候へ。あの舟どもは海賊の舟どもにこそ候ふめれ。こはいかにせさせ給ふべき」といへば、この門部の府生いふや

「そのころなむわきそ。千萬の海賊のありとも今見よ」といひて、皮子より賭弓の時着たりける装束取り出で、麗しくまやうをきて、冠老懸などあるべき定にすれば、従者ども「こは物にくるはせ給ふか。かなはぬまでも楯つきなと給へかし」といりめさあひたり。麗しく取りつけて肩脱ぎてめてうしろ見まはして屋形の上に立ちて「今は四十六に寄り來にたるか」といへば、従者ども「大方とかく申すに及ばず」とて黄水をつきあひたり。「いかにかく寄り來にたるか」といへば「四十六に近づき候ひぬらむ」といふ。時にうは屋形へ出で、あゝの黒ばみたる物きて赤き扇を開きつかひて「とくとく清き寄せて乗り移りて移し取れ」といへども、この府生さわがすして引きかためてとろとろと放ちて弓たふして見やれば、この矢目にも見えすして宗との海賊が居たる所へ入りぬ。早く左の目にいたづき立ちにけり。海賊「や」といひて扇を投げすて、のけさまに倒れぬ。矢を抜きて見るにうるはしく戦などする時のやうにもあらず。塵ばかりの物なり。これをこの海賊ども見て「や、これはうちある矢にもあらざりけり。神箭なりけり」といひて「とくとく各漕ぎ戻りぬ」とて逃げにけり。その時門部府生うす笑ひて「なにがし等が前にはあぶなく立つ奴ばらかな」といひて袖うちおろしてこつばき吐きて居たりけり。海賊騒ぎ逃げ、る程に袋ひとつなど少々物ども落したりける。海に浮びたりければこの府生取りて笑ひて居たりけるとか。

土佐判官代通清人達して關白殿に奉合事

これも今は昔、土佐判官代通清といふ者ありけり。歌を詠み源氏狭衣などをうかへ、花の下月の前とすぎありきけり。かゝるすき物なれば後徳大寺左大臣「大内の花見むするに必ず」といざなはれければ、通清めでたき事に逢ひたりと思ひてやがて破車に乗りて行く程に、あともより車二つ三つばかりして人の來れば、疑なきこの左大臣のおはすると思ひて去りのすだれをかきあげて「あなうたてあなうたてとくとくおはせ」と扇を開きて招きけり。早う關白殿の物へおはしますなり。招くを見て御供の隨身馬を走らせし驥け寄せて車の尻のすだれをかり落してけり。その時を通清あわてさわぎて前より轉び落ちける程に烏帽子落ちにけり。いと不便なりけりとか。好きぬるものは少しをこにもありけるにや。

極樂寺僧施仁王經驗事

これも今は昔、堀河太政大臣兼通公と申す人世心ち大事に煩ひ給ふ。御祈ともさまさまにせらる。世にある僧どもの参らぬはなし。参り集ひて御祈ともをす。殿の中騒ぐ事限りなし。こゝに極樂寺は殿の造り給へる寺なり。その寺に住みける僧ども御祈せよといふ仰もなかりければ、人も召さず。この時に或僧の思ひけるは、御寺に安く住むことは殿の御徳にてこそあれ。殿うせ給ひなば世にあるべきやうなし、召さずとも参らむとて仁王經を持ち奉りて殿に参りて物騒がしかりければ、中門の北の廊の隅に屈まり居て、露目も見かくる人もなきに仁王經を他念なく讀み奉る。二時ばかりありて殿仰せらるゝやう「極樂寺の僧なにかしの大とこやこれにある」と尋ね給ふに、或人「中門の廊の隅に候ふ」と申しければ、これこの方へ

呼へ」と仰せらるゝに、人々あやしと思ひそこばくのやんことなき僧をば召さずしてかく参りたるをたによしなしと見居たるをしも、めしわれは心もえず思へども行きて召すよしをいへばまゐる。高僧どもの附き並びたるうしろのえんに屈まり居たり。「さて参りたるか」と問はせ給へば、南の簀子に候ふよし申せば「内へ呼び入れよ」とて臥し給へる所へ召し入れらる。無下に物も仰せられず重くおはしつるに、この僧召すほどの御氣色こよなくよろしく見えければ、人々怪しく思ひけるに、のたまふやう「寝たりつる夢に恐ろしげなる鬼どもの我が身をとりどりに打たれうしつるに、髪づらゆひたる童子のすわえ持ちたるが中門の方より入り来てすわえしてこの鬼どもを打ち拂へば鬼ども皆逃げ散りぬ。何ぞの童のかくはするぞと問ひしかば、極樂寺のそれがしかかく煩はせ給ふ事いみじう歎き申して年頃讀み奉る仁王經を今朝より中門の脇に候ひて他念なく讀み奉りて祈り申し侍る、その經の謎法のかくやませ奉る悪鬼どもを追ひ拂ひ侍るなりと申すと見て夢覺めてより心ちの揺いのこふやうによければ、その悦いはむとて呼びつるなり」とて、手を摺りて拜ませ給ひて棹にかゝりたる御衣をぬしてかづけ給ふ。「寺にかへりて猶々御祈よく申せ」と仰せらるれば、喜びて罷り出づる程に、僧俗の見思へる氣色やんとなし。中門の脇にひめもすに屈み居たりつる覺えなかりしに、殊の外美々しくて罷出にける。されば人の祈は僧の淨不淨にはよらぬ事なり。唯心に入りたるが驗あるものあり。母の尼していのりをばすべしと昔より言ひ傳へたるもこのこゝろなり。

伊良緑野世恒毗沙門御下文の事

今は昔、越前の國に伊良緑の世恒といふ者ありけり。取りわきて仕うまつる毗沙門に物もくはで物のほしかりければ「助け給へ」と申しけるほどに、門にいとをかしげなる女の「家主に物言はむとのたまふ」といひければ、誰にかあらむとて出で逢ひたれば、かはらげに物を一盛「これくひ給へ。物はしとありつるに」とて取らせられたれば、喜びて取り入れて唯少しくひたれば、やがて飽き充ちたる心ちして二三日は物もほしからねばこれを置きて、物のほしき折ごとく少しづゝくひてありける程に、月比過ぎてこの物も失せにけり。いかゞせむずるとて又念じ奉りければ又ありしやうに人の告げれば、初にならひて感ひ出で、見れば、ありし女房のたまふやう「これ下文奉らむ。これより北の谷峰百町を越えて中に高き嶺あり。それに立ちて、なりたと呼ばし物出で來なむ。それにこのふみを見せて奉らむ物を受けよ」と言ひていぬ。この下文を見れば「米二斗わたすべし」とあり。やがてそのまゝ行きて見れば、實に高き峯あり。それにて「なりた」と呼ばば恐ろしげなる聲にていらへて出で來たるものあり。見れば額に角おひて目一つあるもの赤きたふさしたるもの出で來て跪きて居たり。「これ御下文なり。この米得させよ」といへば「さる事候ふ」とて下文を見て「これは二斗と候へども一斗を奉れとなむ候ひつるなり」とて、一斗をぞ取らせたりける。そのまゝに受け取りて歸りてその入れたる袋の米を使ふに、一斗盡させざりけり。千萬石取れども唯同じやうにて一斗は失せざりけり。これを國守聞きてこの世恒を召して「その袋我に得させよ」と言

ひければ、國の内にある身なればえいなきして「米百石の分奉る」といひて取らせたり。一斗取れば又出でさ又出でさしければ、いみじき物儲けたりと思ひてもたりける程に、百石取りはてたれば米失せにけり。袋ばかりになりぬればはひなくて返し取らせたり。世恒が許にて又米一斗出で來にけり。かくてえもいはぬ長者にてぞありける。

相應和尚上 都卒天事付染殿后奉祈事

今は昔、叡山無動寺に相應和尚といふ人おはしけり。比良山の西に、葛川の三瀧といふ所にも通ひて行ひ給ひけり。その瀧にて不動尊に申し給はく「われを負ひて都卒の内院彌勒并の御許にゐて行き給へ」と、あながちに申しければ「極めてかたき事なれと強ひて申す事なればゐて行くべし。その尻を洗へ」と仰せければ瀧の尻にて水のみ尻よく洗ひて明王の頭に乗りて都卒天に登り給ふ。こゝに内院の門の額に妙法蓮華と書かれたり。明王の給はく「これへ参入の者はこの經を誦して入れ。誦せざれば入らず」とのたまへば、遙に見上げて相應のたまはく「我この經よみは讀み奉る。誦する事いまだかなはず」と。明王「さては口惜しき事なり。その義ならば参入叶ふべからず。歸りて法華經を誦して後参り給へ」とて、掻き負ひ給ひて葛川へ歸り給ひければ、泣き悲み給ふ事かぎりなし。さて本尊の御前にて經を誦し給ひて後本意を遂げ給ひけりと成む。その不動尊は今に無動寺におはします。等身の像にてぞましましける。その和尚かやうに奇特の効験おはしければ染殿の后ものけに惱み給ひけるを或人申しけるは「慈覺大師の御弟子に無動寺の相應和尚と申すこといみじき行者にて侍

れ」と申しければ、めしにつかはす。則ち御使に連れて参りて中門に立てり。人々見れば長高き僧の鬼の如くなるが信濃布を衣にき、楯の平足駄をはきて大木總子の念珠を持てり。「その體御前に召し上ぐべきものにあらず。無下の下種法師にこそ」とて「唯篋子の邊に立ちながら加持申すべし」と各申して、御階の高欄のもとにて「立ちながら候へ」と仰せくだしければ、御階の東のわきの高欄に立ちながら押しかゝりて祈り奉る。宮は寢殿の母屋に伏したまふ。いと苦しげなる御聲時々御簾の外に聞ゆ。和尚邊にその聲を聞きて高聲に加持し奉る。その聲明王も現し給ひぬと御前に候ふ人々身の毛よだちておぼゆ。まばしあれば宮紅の御衣二つばかりに押し包まれて鞠の如く簾中よりころび出でさせ給うて和尚の前の篋子に投げ置き奉る。人々さわぎて「いと見苦し。内へ入れ奉りて和尚も御まへに候へ」といへども、和尚「かゝるかたゐの身に候へばいかで罷り上るべき」とて更に上らず。初め召しあげられざりしを安からず憤り思ひて唯篋子にて宮を四五尺わけて打ち奉る。人々まわびて御几帳どもをさし出して立てかくし、中門をさして人を拂へども極めて顯露なり。四五度ばかり打ち奉りて投げ入れ祈りければ、もとの如く内へ投げ入れつ。その後和尚まかりいづ。「暫し候へ」といひれども「久しく立ちて腰痛く候ふ」とて、耳にも聞き入れずして出でぬ。宮は投げ入れられて後御ものけさめて御心ちさわやかになり給ひぬ。験徳あらたなりとて僧都に任すべしと宣下せらるれども「かやうのかたゐは何でふ僧綱になるべき」として返し奉る。その後も召されけれど「京は人を賤しうする所なり」とて更に参らざりけるとぞ。

仁戒上人往生の事

これも今は昔、南京に仁戒上人といふ人ありけり。山階寺の僧なり。才學寺中に列ぶ輩なし。まかるに俄に道心を起して寺を出でむと志けるに、その時の別當眞正僧都いみじう惜みて制し留めて出したまはず。まわびて西の里なる人の女を妻にして通ひければ、人々やうやうさしやき立ちけり。人に普く知らせむとて家の門にこの女の頭に抱きつきて、うしろに立ち添ひたり。行きとほる人見てあさましがり、心憂がる事かぎりなし。徒物になりぬと人に知らせむためなり。さりながらこの妻とあひ具しながら更に近づくことなし。堂に入りてよもすがら眠らずして涙を落して行ひけり。この事を別當僧都聞きて、いよいよたふとみて呼び寄せければ、まわびて逃げて葛下郷の郡司が聲になりけり。念珠などをもちと持たずして唯心中の道心はいよいよ堅固に行ひけり。こゝに添下郡の郡司この上人に目を留めて深くたふとみ思ひければ、跡も定めずありきける。尻に立ちて衣食沐浴等を營みけり。上人思ふやういかに思ひてこの郡司夫妻はねんころに我を訪ふらむとてその心を探ぬれば、郡司答ふるやう「何事か侍らむ、唯貴く思ひ侍ればかやうに仕るなり。但し一事申さむと思ふ事あり」といふ。「何事ぞ」と問へば「御臨終の時にかにしてか値ひ申すべし」といひければ上人心に任せたる事のやうに「いと易き事にありなむ」と答ふれば、郡司手をすりて喜びけり。さて年比過ぎて或冬雪降りける日、暮方に上人郡司が家に來ぬ。郡司喜びて例の事なれば食物下人どもにも營ませず、夫婦手づから自らしてめさせけり。湯などもあみて臥しぬ。曉は又

郡司夫婦とく起きてくひ物種々に營むに、上人の臥し給へるかたかうばしき事かぎりなし。匂ひ一家に充ち満てり。これは名香など焼き給ふなりと思ふ。「曉はとく出でむ」とのたまひつれども夜明くるまで起き給はず。郡司「御粥出できたり、このよし申せ」と御弟子にいへば「腹あしくおはする上人なり。悪しく申して打たれ申さむ。今起き給ひなむ」といひて居たり。さる程に日も出でぬれば例はかやうに久しくは寝給はぬに怪しと思ひて寄りておとなひけれと言なし。引きわけて見れば西に向ひ端座合掌してはや死に給へり。あさましき事かぎりなし。郡司夫婦御弟子どもなど悲み泣きみ、かつはたふとみ拜みけり。曉かうばしかりつるは極樂の迎なりけりと思ひあはす。をばりに逢ひ申さむと申し、かばこゝに來たり給ひてけるにこそと、郡司なくなく葬送の事もとりさたしてけるとなむ。

秦始皇自天竺來僧禁獄事

今は昔、もろこしの秦の始皇の代に天竺より僧渡れり。帝あやしみ給ひて「これは如何なる者ぞ。何事によりて來たれるぞ」。僧申して曰く「尺迦牟尼佛の御弟子なり。佛法を傳へむため遙に西天より來たり渡れるなり」と申しければ、帝腹立ち給ひて「その姿極めてあやし。頭の髪かぶらなり。衣のてい人に違へり。佛の御弟子と名のる、佛とは何ものぞ。これは怪しき者なり。たゞに返すべからず。ひとやに籠めよ。今より後かくの如く怪しき事言はむものを殺さしむべき者なり」といひてひとやに据ゑられぬ。「深く閉ぢ籠めて重く戒めて置け」と宣言を下されぬ。人やの司の者宣言のまゝに重く罪あるものおく所にこめて置きて戸に鎖

多ぢやうさしつ。この僧「惡王に逢うてかく悲しき目を見る。我が本師釋迦牟尼如來滅後なりともあらたに見給ふらむ、我を助け給へ」と念じ入りたるに、尺迦佛丈六の御姿にて紫磨黄金の光を放ちて空より飛び來たり給ひて、この獄門を踏み破りてこの僧を取りて去り給ひぬ。その序に多くの盗人とも皆逃げ去りぬ。獄の司空に物のなりければ出で、見るに、金の色したる僧の光を放ちたるが大きな丈六なる空より飛び來たりて獄の門を踏み破りて籠められたる天然の僧を取りて行く音なりければ、このよしを申すに、帝いみじく恐ぢ懼り給ひけりとなむ。その時に渡らむとしける佛法世下りて後漢には渡りけるなり。

後の千金の事

いまは昔、もろこしに莊子といふ人ありけり。家いみじうまづしめて今日の食物絶えぬ。隣にかんあとうといふ人ありけり。それがもとへ今日くふべき料の粟を乞ふ。あとうがいはく「今日ありておはせよ。千兩の金を得むとす。それを奉らむ。いかでかやんとなき人に今日まゐるばかりの粟を奉らむ。返す返すおのが耻なるべし」といへば、莊子のいはく「昨日道をまかりしにあとによばふ聲あり。願れば人なし。唯車の輪あとのくぼみたる所に溜りたる少水に鮒ひとつふためく。何ぞの鮒にかあらむと思ひて寄りて見れば、少しばかりの水にのみじう大なる鮒あり。何ぞの鮒ぞと問へば、鮒のいはく我は河伯神の使に江湖へ行くなり、それが飛び損ひてこの溝に落ちりたるなり、喉乾き死なむとす、我を助けよと思ひて呼びつるなりといふ。答へていはく、我今二三日ありて江湖といふ所にあそびしにいかむとす、

そこにもて行き放さむといふに、魚のいはく、更にそれまで待つまじ、唯今日一提ばかりの水をもて喉をうるへよといひしかば、さてなむ助けし。鮒のいひし事我が身に去りぬ。更に今日の命物はすば生くべからず。後の千のこがね更にやくなし」とぞいひける。それより後の千金といふ事名譽せり。

盗跖與孔子問答の事

これも今は昔、もろこしに柳下惠といふ人ありき。世の賢きものにして人に重くせらる。そのおとゝに盗跖といふ者あり。一つの山懐に住みてもろの惡しきものを招き集めておのが伴侶として人の物をば我が物とす。ありく時はこの惡しきものどもを具する事二三千人なり。道に逢ふ人を滅し耻を見せよからぬ事の限りを好みて過すに、柳下惠道を行く時に孔子に逢ひぬ。いづくへおはするぞ。みづから對面して聞えむと思ふ事のゐるに、賢く逢ひ給へりといふ。柳下惠「いかなる事ぞ」と問ふ。「教訓し聞えむと思ふ事はその舍弟もろもろの惡しき事の限を好みて多くの人を歎かする、など制し給はぬぞ」。柳下惠答へて曰く「おのれが申さむ事をわへて用ひ給はむ。さきにわらず。されば歎きながら年月を經るなり」といふ。孔子のいふ「そこ教へ給はずば我行きて教へむ。いかにあるべき」。柳下惠いふ「更におはすべからず。いみじき詞を盡して教へ給ふとも靡くべきものにあらず。かへりて惡しきと出で來なむ。あるべきことにあらず」。孔子いふ「惡しけれど人の身を得たる者はおのづからよき事をいふにつく事もあるなり。それに惡しかりなむ、よも聞かじといふ事は僻事なり。よ

し見給へ。教へて見せ申さむ」と、詞を放ちて盗跖が許へおはしぬ。馬よりおり門に立ちて見ればありとあるものぞ、鳥を殺しもろもの悪しきことを築へたり。人を招きて「魯の孔子といふ者なむ参りたる」といひ入るゝに、則ち使歸りていはく「音に聞く人なり。何事によりて來たるぞ。人を教ふる人と聞く。我を教へに來たれるか。我が心に叶はし用ひ。叶はずば肝なますに作らむ」といふ。その時に孔子進み出で、庭に立ちて先盗跖を拜みてのほりて座に着く。盗跖を見れば頭の髪は上さまにして亂れたる事遂の如し。目大きにして見くるべかず。鼻を吹きいからし牙をかみ鬚をさらして居たり。盗跖がいはく「汝來たれるゆゑはいかんぞ。確に申せ」と怒れる聲の高く恐ろしげなるをもちていふ。孔子思ひ給ふ、かねても聞きし事なれどかくばかり恐ろしき者とは思はざりき、かたぢ有様聲まで人とはおぼえず、肝心も碎けてふるはるれと思ひ念じていはく「人の世にあるやうは道理をもちて身のかざりとし、心のおきてとするものなり。天を戴き地を踏みて四方をかためとし、おほやけを敬ひ奉り下を憐み人に情を致すを事とするものなり。まかるにうけ給はれば心のほしきまゝに悪しき事のみ事とするは當時は心に叶ふやうなれども終惡しきものなり。されば猶人はよきに隨ふをよしとす。まかれば申すに隨ひていはずかるべきなり。そのこと申さむと思ひて参りつるなり」といふ。時に盗跖雷のやうなる聲をして笑ひていはく「汝が言ふ事ども一つも當らず。そのゆゑは、昔堯舜と申す二人の帝世にたふとまれ給ひき。まかれどもその子孫世に針さすばかりの所を知らず。又世にかしこき人は伯夷叔齊なり。首陽山に伏せり飢ゑ死

にき。又その弟子に顔回といふ者ありき。賢く教へ奉りしかども不幸にして命みじかし。又同じき弟子にて子路といふ者ありき。れいの門にして殺されき。まかれればかしこき聲は遂にかしこき事もなし。我又惡しき事を好みともわざはひ身に來らず。譽めらるゝもの四五日に過ぎず。勝らるゝもの又四五日に過ぎず。惡しき事も善き事も長く譽められ長く勝られず。まかれれば我好みに隨ひふるまふべきなり。汝又木を折りて冠にし、皮を持ちて衣とし、世をおそらおほやけにおぢたてまつるも二たび魯に移されぬとを衛にけつらる。なごかしこからぬ。汝がいふ所誠におろかななり。速に走りかへりぬ。一つも用ゐるべからず」といふ。時に孔子又いふべき事覺えずして座を立ちて急ぎ出で、馬に乗り給ふに、よく應しけるはや轡を二たび取りはつし轡をまきりに踏みはつす。これを世の孔子たふれすといふなり。

宇治拾遺物語

明治三十七年二月十日印刷
明治三十七年二月廿日發行

(宇治拾遺本文)

正價金三十錢

校訂者 國文學會

東京市神田區鍛冶町四番地

發行者 伊藤岩治郎

東京市神田區小川町一番地

印刷者 多田榮次

東京市神田區今川橋通

發行所 誠之堂書店

(電話本局九百四十九番)

三木五百枝註釋

宇治拾遺物語註釋

註釋全二冊 正價金八十錢
本文全二冊 郵稅拾錢

文科大學教授 文學博士小杉相郎監修
●**國語作文**
本書は小杉博士の著述を精選し、國語の基礎知識を養成し、作文の技術を習得させる。全二冊、全五十五課。正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし**
此書は小杉相郎が古より徳川の末年に至るまでの國史を解題して之に對する短評を各項に加へ國史國文を學ぶ者の案とせるものにて博士が遺著として曾て故郷に頒たれたる書なり中學以上の學生諸君は勿論國史を研究せんとする學者受験者等に最良の參考書なり
●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**新編 紫史**
一名通俗源氏物語
新編紫史は源氏物語の通俗版として、源氏物語の全貌を簡明に解説し、その背景や人物の関係を詳しく説明している。全二冊、全五十五課。正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國文學界**
十二冊前金一圓八十二錢廿五冊前金三圓六十一錢五拾圓
●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國學院講習會講義**
國學院講習會編輯
●**國語作文** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

●**國史學のしるし** 小杉相郎著 全二冊 正金五拾圓、郵税五圓、送料五圓、計七拾圓。

御伽草子

本書は室町時代の前に... 御伽草子 全四六判 正税金七十五銭

新編御伽草子 全二冊 正税金七拾五銭

大教正岡吉風編 御伽草子 全一冊 正税金五十銭

和歌三代集

和歌三代集 全六冊 正税金五十五銭

古今和歌集 全二冊 正税金二十六銭

新編御伽草子 全二冊 正税金七拾五銭

新古今和歌集

正税金廿五銭

大教正岡吉風編 御伽草子 全一冊 正税金五十銭

本誌は有名なる諸先生自ら得意の各料を擔任せられ普通教科

大和郡 諸曲訓蒙圖繪 全四冊 正税金四十五銭

英和高等會話

本會正價金三十錢... 原價金三十錢... 郵税二錢

英和實用新會話

博習博士イストレーキ編著... 原價金二十錢... 郵税二錢

英和商賣人會話

博習博士イストレーキ編著... 原價金三十錢... 郵税四錢

前置詞用法

英文入學問題答案... 全... 正價金三十錢... 郵税四錢

都の春風

天四居士西村時彦著... 全... 正價金廿五錢... 郵税四錢

紀行八種

天四居士西村時彦著... 全... 正價金三十錢... 郵税四錢

南島偉功傳

南島偉功傳... 全... 正價金四十錢... 郵税六錢

山色水聲

山色水聲... 全... 正價金十三錢... 郵税一錢

受験の秘訣は... 過去の経験... 必要にして其性質

摘要代算術

摘要代算術... 全一冊... 正價金四十四錢... 郵税六錢

幾何學

幾何學... 全一冊... 正價金四十四錢... 郵税六錢

代數學問題詳解

代數學問題詳解... 全一冊... 正價金五十八錢... 郵税八錢

都名所圖會

都名所圖會... 全一冊... 正價金拾錢... 郵税四錢

風流順禮

風流順禮... 全一冊... 正價金拾錢... 郵税四錢

河内紀行

河内紀行... 全一冊... 正價金拾錢... 郵税四錢

奈良巡

奈良巡... 全一冊... 正價金拾錢... 郵税四錢

紀行八種

紀行八種... 全一冊... 正價金三十錢... 郵税四錢

